煙霞小景

卷三

特別
イ4
3152
44

14
3152
44

95 - 68

烟霞小景

卷參

MAGURU. 25.

備後尾道港

煙霞小景序

吾友久保青琴、爲人雅澹簡撲、善詩而喜游、每得暇日、短節輕鞋、獨探異境、翺翔吟嘯、意適忘返、苟有一山之美、一水之奇、必尋討眺矚、雖數百里之遠、毫不爲意也、余以同癖之故、相會評景論文、未曾不情合心期也、頃青琴袖一書而來訪、囑序余、余未知其爲何書也、驚曰、僕之言辭、不敢可冠以鄙言、不聽而去、乃繙讀一再、忽而山、忽而水、朝曛之前、暮霞之際、或雷、或雨、雲飛風捲、動心駭目、毀墟之

邊荒墳之畔憑吊感愴悲歌擊筑使人神魂飛越恍恍乎
如身踐其境而目睹之於是拍案呼快者數回其文凡十
有五篇皆以邦文記行程者題曰煙霞小景蓋與其詩集
相待而足爲好游者之資焉余纔卒業而青琴促者太急
因據數言以塞責云明治丙申初夏西海九十九峰生識

煙霞小景　第三卷

第七、避禮記

松島の初日　斗藏山寺　狂風

第八、平泉紀行

中尊寺　巖美溪

第九、肘雲紀行

靈山　溫泉巡り　有耶無耶

二口嶺

第十一 旬一蹶の記 南部家

出はじめ　迷ひ路　盛岡
巖手山　南歸の恨

第十一 西遊小記

舟車千里　福陵三旬　太宰府
福岡以東　彦山　耶馬溪
壇浦　山口　錦帶橋
巖島　三備　後樂園

臥龍松　赤穗　書寫
播州名所　須磨所かし　神戸
航東

第十二 關北の雪

怪しき名所　溫泉村　邉地の驚花
浮島　鳥湯　三日間

雖懲記

一、松島の初日

癸巳の歳十二月廿四日より休暇を得んと成るや早はや天爭の眼前に横はり行くさらなく出でず漸く床に付けて鶴の樊を脱し心快し年二歳の虚懲の盛衰多少の道心を損ずるこの頃まきに疲弟輕鞋轎吋は紅塵夢の如く出で叔靈の氣を去り心頭脳を洗せむ者を出で立ちしは十二月三十日の事なり乃ち雖懲の以て富士を見ることを友なる常野の海とともに心をふるい絲竹難く打伴れ出で相議して第一番に松島を越きかしこに泊し我懲の

松島をさして和震拍子は和日の老練まむきす
此日若年同志の人可りし菅子田意吉連て樵ひ和
し坂僧にて生厚ぎりしが遠慮なく原野打過ぎ
松並木の堤の上に休憩し煙草を折し一疋の犬頭を低垂
て揺し動しく来りて去らず一里許つき慌ひて来れり
と愛らし
天気いとよく快晴にして雲翳なく風穏からず暖きこと三四
月の頃もかくやと前日雪降りしが海は左迄悪しからず
見しば泉嶽は実元をして雪景の咲とを載きて
ながら面白し

利府より先の方は路前並に悪にして慮こと思ひやり草鞋
重く困難する程なる際餅りを宜しからず切り行程松
島停車場まで富山つきしは午後四時頃なりき
寺にて同じ今少し先に奥樵生徒らし数人集りて面
白く今朝発せし人達なるべしと立ち去りしといふ武蔵
岡の窟の下にて伊達しばし眺望の餅を食なきに茶を持り
来りし山坊主に問ひ御日様は何處より出るかと杉の
森陰よりと云ふに方角殆異しく海より昇るなり壮観
はいつまでも少しく未意なく思ひしが詮方なければ今宿
は此処にとまるべしとて寺僧に頼ば直に承諾して安殿に

導く

夕飯いとゝろき行燈の下にて暑を食ふがゝとして濟し夜は
しむくとして更け明るに従ひ眠る段まれば不浄き布團夜
具共二枚宛を重ねかけれども薄きこと煎餅の如く弾性きこと
石の如く僅まく困るにまして予は風邪を生じ咳嗽出られ
ば困却一入にして二人相談し種こ工夫を凝らし豆腐を合せて臥
し上には布団羽織袴等を重ねたれども暗きこと更なり
寒風甚しく輾轉反側す度は一度起りて弾合かけて
行燈を点ずにしてかれこれする事一刻相着の間すり風より厳
寒忍ち寒らなり水の如く寒き事実にかゝ寒き床にはいねぎる

べし故ど笑て嘆息し種こ改良を加へしも意の如くなる事
在各御里慈悲の事一なれ思ひ出で安眠難し難く寒
とシ言なく果て疲れて眠に入りしも夢覚むること幾回なるを知ら
ず

明治二十七年甲午歳春王正月元日 山下孤村の雞聲
起きとして三男まし聞かるに余も眠を起ち戸の外見れば晴
風冷かに雪し猛しく吹し即ち又食事に入りて温を暖ること暫
戸の隙の光の見えたる紫雲閣下に行き見れば東天微
を生じ今朝一客の和書に和島三面からは見へ初て四海波
なき君が御代枝を鳴らす鶯の如東風のことを吹に歓ぶ雪の

蟠りて其下に燦爛たる光を放ち漸く此辺まで色を帯
び暫時にして皇々然たる初日の影は曈曨として昇り来る
きまでにして凝然し難く水は紅の霞と黄金の波とを浮
べ今は淡島のさざなみ松の翠絵にとよくらん似たる新春
の光景日東霊秘書の氣の鍾る所一氣天地に充ちては煙霞
雲霧の霊なり地上に落ちては山川湖海の美を造り人に於
ては忠勇義烈の剛なる等地は昔松島には昔元日美絶
の景象なるべしに筆紙の描き尽すべき何ぞ及ぶ所にあ
らず雲間より出る故日は彼の杉陰より昇りて較遠き
し昨日海天より登りしは天幸と云ふべし今壱岐は指く能

はず
餅搗く音の聞えし御殿様には出し給ふ単生の三宝
お供に乾かす折に迫せしよりにて三宝の半分を焼き失ひ
ままに謝しもせず其代りとは云ひ三千弐百包み出使の庭
鈴なし勇き山まとりて松島を正り歓日接待役を等
のと同じく元日は朝四時過りしより村端の一軒にて元日に
餅屋は不云なりと云ふ菅丈の服義に赤飯して年寄りの
雑煮餅魚の子の粧り肴数挑をもの肴指の塩竈
の者は此処にて皆子ども独り昔日は浦田より白ふ

独り拂暁なる佐野の渡の名を負ひて路に鶴を霜に
ぬれ鶴衣を着る浦となりて蓑笠の雫彼と合
雪猫は歌まぬ金宵は清聲の鞍鞘をかすめ燭下
に詩書繙く孤宿叔山先生と元旦の祝を送り如得
夜着布団元年は前相に
二日朝衣中に入り玻璃窓を隔て青海原の波間より
豊葉上る朝日景の珊瑚色なるを見る宿を出て磯
辺に行く雪は前夜中に止みて
三年引き放ちし者の是し一日にも数きつめこがむ御
鮮に上れば海のけしき常よく潮波正月屋

こは此あたり浦

金閣五楼の美を呈し人間の者に非ざるが如し岬上雪
特に深く蛙恨殺跡なければ我とそ先登第一なりと
独り頷き快きこと言はむ方なし数の波張り推開きて渡り
蒲生窪辺荒濱閑上増田すきて先沢にて一泊す
明くれば三日何の道辺りて角田を経館山に登り古人根
元伸之助を訪ひ甚家に富む数日、日に一番なく大燈と
倚りて西に對し朝より夜まで酒酌む蓋し雖寒の
方旦を見ず上旅と及一笑

二、斗藏山寺

羽黒曰青琴避日者
避寒法大概莫非酒
曰詩仙是酒仙

館山より一里有半角田町の近傍より眺め望べし山は高
かるべし杉木立むらりとして寺などつくるべきまの所なり路
には大沼といふ河周回九里鴨鴨雁鵝鴨おん集り中央の
洲渚に群れ鳴きて列をなしてかしましきばかり
樹蔭ちは半里許なるが木の根岩角路を塞ぎや嶮しく
河流を辿りなり山上に斗藏山大悲閣と稱する刹宇地
方著名の寺刹なり大同二年田村の將軍建立する所也
本尊は右脇侍萬治三年野犬の延焼する所
なり縁起記誌長し仔細は帰し今日生の佛心改まり
て新に觀音を本尊とする開山は伝の尊者なる慈覚
大師にして宗旨は真言宗なりとぞ
山上書院には美竹多く昔しは切りて箭をなせしなる故封内風
土記にもしるせり
山上四方の眺望は富士近く阿武隈の灌漑する所の平原
を瞰下し相馬の群山奔馬の如く走り西方遠く山襞を
なす吾妻山の嶺より黒煙を望むべく其他那境の佳山
は勿論陸奥西部の山光水色眼中に措く快絶
の景色言ふべきもの多し
耳目の余根元生と此地に浴ひ半日の間を消す路中多生
懐古として出山の間係する一條の傳説を記し保も亦懐古

の感に堪へず次に記す此狂風の一篇是なり若し敢術せば一新の絶奇絶妙の傳奇を得べく余亦此日試みむとす

昔黄昏より雨降り雪に変じ翌日降り地上三寸餘なりし又雨と化し終日歌まず七日午時謝して生と相拉し雨を衝き黄昏先沼を辿りて漸軍の家に帰し仙台藩の時分に軍中東より帰る同学数輩百名行停雪場に至れば出迎者の歓声沖がく又我を迎ふ

此行実に霊山の游はむと欲せしに雪深き由空しく果て

三、狂風

昔し佳麗の美なる狂風の詩を作りて連れ添ひかしづく夫の狂暴さかこち千載の遺恨をのこす一篇狂暴の頑愛情の誠を知らず愛の温なるを知る狂風一陣相半の雨を捲いて来れば花なる者狼藉紛乱去れば黙し流水去るのみ花を傷む者風を怒むは情に理の極なるに非ず佳人の薄命を哭にし狂暴の狂に対し誠を聲て攻めざる者なし

往時馬塊坡上に血を濺ぎ花鈿を地無人収のり者なし彼れ国より傾国の貌、娼色寝以を去ること遠からねばかくることを得けむかし然れども無邪気なる恋の戯れに陥ら

一身を犠牲とし碧血を以て山河の主を染め身死し魂
しるかし給まどりし者誰か一掬の涙を濺ぎ花実を墓前
墓前に吊ぎ給せざるものぞ
金山村と云ふ館山の西南五里の所にあり可成の村落なれど
昔し世は刈萱と名れつゝここらは大方伊達氏の領土帰しや静
謐を楽しむの折さに二人の郷士の住めるあり二人は家をり
ねて住み勢猛の有様は萬きらびやかに二家の楼閣屋宅
を鏤の光彩閃を射押領せる地もひろく家子の数幾十
餘り弦むを領主者らぬきまなり
天の郷士とは姫ヶ天の成せる麗質書はめて深閨に
り容貌の美技藝の妙いふに及ばず世に稀なる
品の程佳月宮の仙女罪を得て假に人世に謫せられしかと
怪しまん鄙の村里の眺めとなるべはいとおしくなほ九里
の風深き処女御更衣などいはせて無ふる翠帳の中
にうもれて花をせきも程なり
者を懐ふ女子顔むのごとく二八軍有 彼の年を遠し
如むむ物の悲しの自ら袂を前しいつかかまを見るけむ意中
人の忘れやらぬ生霊九の月下を留めるる折の姿かな
主税の狩衣の汐切りて歌書き送りうる在五中将の紅
の襟佳世自影の写を深ひて夢か現か何か思ひ中しの

れば色外に顯はれ包むをすれども包みかねて忽ちこの
の事色に出傷つく病み煩ひ計りなり
姫の眷属のかいひと今假りに櫻と申ひつるが召し遣ふ侍
女の中に紅葉とて心さこうる可し女は女ども相憐む念
深く漸に秘密を悟り甘言を設し萬事は和
つ御仕なされ此恋必ず協て進まずは俗の忠義
者の口上迄まで世上に有り難き恋愛小説なり
四一輪のごとして今更言までもなし
紅葉は財多き的の有心なりかをつまとめり其は他人を伺ふ
都家の御方の子にてありし西家の御方に拾ひ取られ不釣合と云
ひ流れと仰せしき緣なりが最重を置く恋人なる者は姫
に稀なる半狂の合て居らし
其実親は いふまでなく美なり年も姫と似つかはし生来武
藝を好み猟を以て樂とすること賢しの猟人の如くよろづ物の
情を知られば武恋の結果以ての外なく然西家の同の主家
すれば書或は所ゑきも紅葉は先つ其心の性を姫を慰む
為に過ト思のありまゝ、せ墨書一を文を引受け自負
が性さなりぬ戀に恋の姫は親なりめ筆とを年の遠近く
実家が書もそもそもわたりけむ
使は不結果ありかり紅葉は姫に對面を煩に宿せしなり

恋を荷する能はず更に一計を案じ姫の傷に慰
めたり
春来れば郭巨の家前へ出て雉子などの鳴く仮の少
年狩場を好きは日一日かけまはり駿河の獲物の果さ
ぬ日なし狩り供皆却て待ち兼て人手薄山と登
り野を越せども
跡傍の花蔭より眺れば美人まろぶかゝる身を投げて
情無しと泣めしと乙女心の恥かしを打忘れ恋の奴となり身
を情を如程なれば恥ならぬさまにかき口ずさむ紅葉英
の深くしの面のたゝりし心の誠を確かめもしぬ

少年は理実我を欺く喩へなし百方の辯疏も一効なく手詰の急なるに脅かして去らしめ
ぬ果て果て狂風暴れて一掃し芳樹青葉の暮れもせぬ
に花は紅葉の詩難く神霊の劇変る心理の傾き猛雑
なるものなれば跡は紅葉の哭くのみ
暮鐘の聲は昔り寂寞きぬ乙女は思れ乎を殺して居
の聴くしと一般軍者師に於し少年は昭に怖りの身は大罪
を冒しきり一心の誠を以て我前に供へる一乙女の屍は青葉
我前を横り艶魂漠然、玉骨已に冷に九泉万里の涯にして
暮山寂として夜のみし

ここに学業を完めぬ死して跡を追ひ冥路の旅を共にせ
花下の座に刀光寒く閃かせしに紅葉の止むより先に老僧
の尊げなる手をもて刀をおさへ一時に法の道をきき聴衆の止めより
僧は直に仙堂を辞し政宗公に見へ事のたし申上げ年七
ちなし西家世々絶えこの夫年は一年を指ひとり
きゝ少年の心の病苦はとゝはむ方なく枕の夢さへ侍ひの
へぬ式の和の夢も枕にかの女ありし昔しに変らぬ姿なりし
現世の事は妻の罪なれば恨み怒みも思はぬが君を思ふ
片の恋の涙りとゞかに重荷となり魂中有の親迷し冥
路に行く計ばかりは心の試まゝまゝば四九日目に

妻の塚起して見む心し物を得まほい西家の幸福全
りしはそなり妻は添ひし同じ墓に蓮の華の一隅と今も
待ち侍らむなど門とな〳〵枕となく同きしのから〳〵歌
曰
相て世日となれば疑信の中に其言のいく塚疫きて見れば死は
まけるかゝく棺底に叙この聲一所り一所り挙げしは二人の男の子
のあなたにてなりき
西家の恋は二人を待て其事同じ竟寄りき
ことなりそし藩主より四十九院の姓を賜はり一門益さき
かへしとぞ

式家の後なる青ヶ乙尚ほ金山に行るよし其呼の事など
しるせる記録藏し侍るといふ金は訪ひ見むと心思ひしに道
之増行かれし本は式阿ゝりの傳説なりと人と書く知らが手間
の為何と謂ふらむ事なる哉

平泉紀行

奥の羽道に蕉翁が杖をひきし跡なつかしく武蔵耀の印山河岩かぢ訪ひ見むと思ひしに折しも三月十五日一行仙台を発し松島より塩竈に渡るよし定まりければ萬に便よしと心そらに勇む四月十日の朝出船の笛角聲大き鼓り全車食を獻て整を結束して発す天地肅々として萬籟寂寥村犬聲の杳を聞しむ行ゆく平野漠々として一望際なく亂雲月を吞む山嵐吹て清冷肺腑に満つ四月十

先づ引車を投ずる時麓聚ひ来て禁ずる能はず雲
吋黒柚の形ぶ間なく一短長亭驛已すぎ一間に着
し車をとる時に午前五吋半なり

一、中尊寺

一、間より中尊寺に登る其間凡そ二里半官道坦として砥
の如く繕行き届き其路傍一町毎に木標を植つ宝
丁寧すぎたり村家茅舍前桃櫻咲き亂れ小呼美蹟
人方なく一百禽囀として梢を轉り笙を吹ぶが如く琴を弄
に似たり草刈る童牛追ふ男欸乃所聽として春色の濃
やかなるを如何はなし

先づ急坂を攀て高館に上る中尊寺の東數町に所義
經の居りし館の地なり丘上老杉古樹真として天を覆ひ義
經堂此の間にあり丘後前壞して絶崖刮るが如きこと數丈
北上の大江浩々として其下を流る水色蒼然甚深きを知る
水行緩々として河を帶て十余稲一帶の山脈蜿蜒起伏し墟
落の炊烟靄々として今より數百年前此山に其樹蔭を流れ
しを思ふ安倍頼時櫻樹一万株を植へて洛の東山と擬せしは
此山のことなり顧みて西南を望めば一島丘ありて金鶏山と名
く秀衡の築きし所にして平泉鎮護と子孫の長久とを虞り
金鶏雌雄を伏して此山頂に埋めしなり山下の低所に水あ

清衡の盛夏に冷しを処なりと云ふ今は農夫の来て鍬鋤
を洗ふに任すとぞ
表坂下の右方に薩摩松亀井松鈴木松東屋松などあり
各義経に随て北国にしも年植せしものといふ是に反字
皆枯れし様なり左方に薩摩年植の蒲墨樓あり折し
爛々燈として冥きみぐれ朝日白きを愛すし之と相對
して敕願日蹟中尊寺の標柱いと美しく建てらるゝ是よ
り急坂を登ること少島はして月見坂を達す下乗の高札左方に
り此邊両側老杉林立陰として冷氣肌を犯し危知らぬ鳥
の鳴音叫び寂寞を破るのみ進んで金色堂に達す

金色堂に光堂といふ清衡の創建かゝる上下四面悉く麗
を掛け黒漆して其地を覆し金箔を貼し金色を耀かす内部
は鐫柱彫梁皆螺鈿珠玉を装ひ中壇には七宝荘厳冊青
の柱をなす上壇上仏像十一軀を安置し三壇中に
は清衡基衡秀衡霊柩を蔵む百年の星霜を経て風打雨
淋金箔剝落し桷椽梲桷大に頽廢に赴きしこと遺憾な
れども而して茂の威風実に想見するに餘りあり傷に芭蕉の句碑
経蔵鐘楼など荒破れ礎苔に埋もれしうたてきや此
邊櫻花多く春の日影のうらかに花英繽紛として風と戯ふ

寺堂の重なる者は以上の四三過ぎざれども其他猶若干の建物
有り皆老朽して見るに忍ずず平泉の古蹟今や荒廢して麦
秀で、歎ずべし三代豪華の跡を問ふ獨り此寺のみ
雄慶堂下の丘間に立ちて矚望すれば前面には高館束稲
の山脈蜿蜒として其極まる処を知らず其中間に水流陽光
に映じて輝く銀蛇の如きものは北上の大流なり衣川西より来
て之に合し遠く東海に向て朝宗す右は平泉の故址なり左に衣
川の古柳あり中間驛樹の迹ある者今の官道なり衣川柳
の古址は今の衣川橋の上流数丁の所に存す琵琶の柳と對せり
皆遠史の保帶する所なり悵懷尚に蒼然たり

平泉の故址は金色堂の正面十余町の処にあり寛保元年清衡
之を造営し三代の豪雄此に居して心州を制御せしより此に八百年今や
当時の輪奐一も存せざるかしこに山頂を削平して丘角を築き
立てしを見る古圖を按て館址を探れば前樓春草の末
禽空しく今し老松風に囀せむで古池細蓮を招く夫れ東北
帶の地白河関外に位して全く別天地をなし左右海に接し後に蝦
夷を控へ高山大河美哉の間自然の保障をなすが之土地豊
饒人健に馬駿なり京師と相距る実に数百里英雄豪同に
地起し王化を阻格せしこと故なきに非ざるなり頼義義家の武略
を以て猶ほ此地に轉戦する前九後三を經て固より地勢の然る

難に因る難し亦以て豪族の勢力如何を察するに足り焉
三代の豪富玉楼珠閣絶世の豪奢を尽し帝都に擬せしの跡
何処か残れる前には人烟遠く後に連峰聯る春日雨霏
霏として百花眠るの時秋杜月皓として天地死するの際乱鴉
苦鳴し士雉腹に鼓打つるやいづれに定めなき浮世の常と
は以て榮枯盛衰の甚しき一に斯くの如しかな
毛越寺をすぎ達谷に向ふ二里半許り沿道の細流及び激湍
詩吟し杉杉蔭をなして天日を蔽ふ四方悠々数町に亘る仏像を
鐫る昔奥羽悪路王の棲居し所にて岩窟の極まる処窓洞を穿
高天館岡中央に立て天を衝る天井は山脊より麓を数百人を坐せしむべし

二、巌美溪

達谷の西南一里半に位し磐井川の上流を穿ちは酢川嶽より
發し諸溪水を聚め東流し此地に来り山峡忽ち陡迫し
水激して岩吼び天飛泉を吐す此瀑は五丈許り玉龍と云ふ
名なる二層にして上を雄滝と云ひ下を雌滝と云ふ観るに堪て名其
景を称にす
滝を下る所の間左右巨岩相對し不拘落として生大蛇伏す
岩の色は赤褐色を帯べく頗る美なり皆大小并屏の痕あり溪
水澹洄し雲根を繞りて流る時に岩底にて怪石中流に立ち
水勢に抗するを見て奔流之に激湍し鞺鞳の聲を為し流沫雪

の如く飛珠霧の如し
崖壁の間には老松點綴し幹枝愈瘦せて風致愈奇なり岩
を攀ぢて崖を下るを得べし水の無施せざる処は碧潭深し飽く迄
清澄徹底なるを以て小鮒の游泳するを數ふべし右岸の崖上に
は數千株の櫻花咲き紅霞を蒸し錦霧を吐き蜂蝶迎春の
輕し其間には栗駒酢山の連山翠黛を拱ひ近きものは沐
するが如し
中流に飛梁を架す天工橋と稱す其側に眺望尊所一つ
橋上に立て衣を振ひ峡の全体を觀ば奇絶の光景俗筆の企及
ぶべからざるを見む南崖に碑あり白川樂翁の篆額あり文化年
橋の始末を記するものなり岸壁及び河身の形状ほぼ寧ろ
瀑の位地大なる者より一変せしもの如し此地昔時藤原氏の游場な
しいふ
全体の風景は崇高奇健を以て許すべきに反して寧ろ纖巧雅
麗といふ適切なるを覺ず何分の規模の小なるを以て庭園
とも見へず人工なるを疑ふ位なり是れ実に其缺典也、然れども東
奥に於ては優に一地歩を占め奇勝と云ふ可き霧伴の枕
頭山水に比べ激賞し木曾の寝覚に似て彼遜れる所多し難し
然し者果して中るか否や余は未だ其所謂寝覚を見ざ
れば之を判別することを能はず

羽黒曰見得秋心奔
瀧唯一本趙地而非高
岳峻峯在傍非削壁
摩天況河流幅員不足数
歩哉露伴之比寝覚
抑籠豊一俗境而目不
足称異也比無之惑矣

皆歸りて一人関に宿し十九日茶柳に向ふ姉崎の松し此道
中に行りしよりどこせつまらなき者なるべし二十日佐沼を經瀬
峠を越て相濱事なく帰り来る。

肘雲記行

一、靈山

靈山の奇勝遠近に聞こえ久しく是非に一度に登はやと思ひたりて去る正月館山村まで出張し雪深くて登ること能はず遺憾なるに由なくつゐしに今年に休日を得んに必ず宿志を遂ぶべきなり

明治二十七年四月二十二日と云ふに仙臺を出で一人同への行軍は二十日を以て終りたれども同志の者数日の疲勞に堪へざる一日は休息せんなど云ふに是非にとも言兼ねて二十一日と云ふ日を俄と遇へ切て出発し[illegible]同志と云ふは遂に減じ今は

伯の息子と田原武藤との三人なり年前に対馬事情に行き
諸事を聚る今福前書記に式部事を伺ひ仕度事
の方に赴くよし見送りの人場の必く我国民と談合し
分概ね木ヶ着し事を下るこれより日本数回通りて見定
こゝより又館山へ行き根元氏宅を訪ひ伸子は未だ帰
ぬよしこに勘待倫さんより酒食に行つきとかれ物語
い程綱分に聞き且紹介の状通を得たり仕方伺して出ず
式行極めて確なる道を取り梁川より出で大石より登る
を思ひ決せども其遠しして且不便利なるを聞きお野村より
登ることに定めぬ

阿武隈山の舟橋を渡り九森を注驛端分岐の必ずより
左の道をとる是より山生路なり路は大きなれども如ども岐路
り人を逢へば必ず問ひ正しの行程二里許なして柯松峠と称
す峠はまほど高からざれども稍峻嶮なり岩石峻嶮なるを
踏みくつしつゝ色々と達すれば陸船の山水一時の中しに岩
沼平野松なども霞みつゝ遠の方を見へ眺望快闊筆言歌
まず

是より皆山路なり岩山一名上り一名下り或は急峻或
は峻に見送り眺り四周山なしはなし前を見し天遠の平野
今は脚下の岩石となり山中の炭焼の煙の昇るを見る事

にすぎは島聲を溪響に漸々として畑村に入る村は
いと大きくして東西七里ばかりと聞く人烟稀少にして山間溪
底に数家点散在するのみ是より路は枯野の中に行く日の
入るに臨み暮象殊にあはれなり玉野につきし頃は日全く
暮れぬ館山より此処まで凡そ七里頃は曖昧不明の間
なれば毫も忘び誤ることなかりしは天幸なりけり
前面を見れば実に高山の峯霄の色漸く黒みかゝり
暮雲既に山腰を包み眺りも秋かなきする者のいく影象の奇
絶なる実に同じもしるき霊山なり
逆旅を尋ぬるに此処より従来一軒ありしが去歳祝融の災に罹
り僅に築中にして外に一軒なしと聞き大に失望せしが紹介状の
用はかゝるときなりとて宛名の主人某を訪ふ某七十餘なれども健脚
飛然此く霊山岳の事詳に物語り四国きたりしに彼方より先
づ道来茶菓として小柄有る故に御案内設すべき筈なれども意
の任せずなれば又今和は御泊宿すべき手筋なしとの
しかる故却て御厚意なれども此方に所餘の代とり〳〵と返下ればき
さなげ作に旅宿ありなれば直ちに謝して去る
二町許りと聞きしに十町餘りもあらん家とては一軒もなし
和月まで上れば星霜西三霊山の巔上に輝き然り漸
く半里餘を歩み旅宿を見問へば是なん旅宿なりと

聞きしまの嬉しさ
座はきさくなれども寺過ぎよく清服きさればぞ官吏などや思ひけむ尊重し敬ふまの可笑まるなれども恭なし感ぜ
湯のかりければ一浴し山青野黄いと酒飲けやがて寝る夜着蒲
団など言葉もなく薄きまがいと長く譚汗油や浸しけむ冷
なること哲の上に臥しと山むがめし壁は壊れて骨露けれ遠
も風の颯として来り燈挑げ仰ぎ見れば天井も張られぬ瓦根
の破れて星西三数ち光放ちて枕上に落ち寂寞の極凄
山限りなく山鬼来り通るのけはひ可し聞こゆ瓦外
の渓水の

四朝起きて前の流に漱ぎと見れば家の前は伊達郡
石戸村石戸十四等木賃宿齋藤治郎右衛門方に宿る
飯すまし堂内者を催ひ先づ虎御山に登る
山は霊山と石封の処にあり岩ず傾き偏に東西に連なる
し鐵梯、鐵鎖よりて山巓の登る南の方は断崖となり高
評なるまし岩下には東西の上処に村落の散在するを見る其標
昨七月我の大日岩に祭り仏の岩の上は一山神祠にて山津見
神を祭る
これより霊山に登る山は四方嶮巖厳壁高峯数仞路
険峻隘車陵の処に一神祠にて是より上は更に嶮一歩一

此近信は有名市表
裏ひなる故郷と皆
立隠市すると云て嵐
はかることなるとき
も此神に祈ることなる
すきるときは和恢ら
ことなし来て信ぜざる
らの祈とに風を祭り
つてことめやすと云は
此辺神の使なるのや

雲出盤城国宇多郡石川谷と計りなり山上処々に巖石起し一峯高さ十丈
岩代国伊達郡西五山
熱斬茅にて皆石塔なり往者満山樹木繁茂せし
老樹岑巒澄黒ましし
と云ふ人住頃の文扶桑として風土満々たる学山なりされ
城壘の南北朝時此国
猿など多く住むと云ふ岩は皆苔むして崇びば弾丸多
顯家陸奥守に任ず義
良親王を奉ず登国府し導者炬を鑄て嵐に火を放ち山を焼たりしかば
日夜の後遂に城陥る既に
上り海は黒みたる巖石猛家諸なりべて出でて弾に奇
顯家西上戦死一其美顯
なり
信濃の国に行し白河を鎮
興と四年三月に氏持国
山頂の一天神なり義良親王霊山在御之時ここの大石を刻
山頂を過て後山若流星
し裏面には弘字の碑文あり相傳ふ贈太政大臣従位北畠顯
を縮て山麓に至る
福島市より半田銀山
家の元弘年間陸奥守に任せらるゝや従醍醐の皇子義良

り還て年の次後山下を
経て歳暮の留のうゝ之を
（東遊録）

親王を奉し岩ト榛よりて賊を討ず則ち是なり 従顯家西上
戦死し其弟顯信州の介に任し白河を鎮す興国四年尊氏の
将畠山高国等遂に城陥を山頂に逃人死せり
又全華山と題する神社あり 天神に遠望て富士は相馬の
海堤を望み西南は信達二郡の山野を眺し半田の銀山は
西に向て吾妻山は其左方に高し東南は則ち遠く全華山と雲
烟髣髴の間に眺望きよしなるが岩は雲氣濃かに四野に
無れこれの文は見えずかず
導者は詳細寓内に記る岩なるべけれ共に登る岩上より諸
村落を下瞰するは彼の鹿野山なる九十九谷の趣に似たり岩

は其数を知らず。ずいぶん実に峻起する谷間に岩石累々として岩壁をなす。
ぶすれば一、二日はかるべしと云ふに昭ぼ見る歌の如く導者
み別れ裏の側に長き岩間の路踏みかなでくる。
霊山絶頂より二里半許の処に霊山神社あり。北畠、祝詞歌
家、鏡、伝、宇敬の四郎を祭る。社官幣殿、社は五頭尚
りて即ち霊山文城の跡なり。不壇九を三百段に日吟小祭
礼を暗しかりき。
大石峰原を経て武陽に渡り高野に飯坂に出で霊山に
達ずる。砂ふる長天嵐気を含み四山の影異なるに天
半の落日は暗然として悲を帯び長と別るを惜むが如し

二、温泉紀行

飯坂につき赤いの旅宿に投し三層楼を宿押し飯坂の
ふる郷、迎国の折り一泊せば熱闘の地なりて春繁く
山谷の岸は奥まりふる渓陽に行りて数山遠開雅
ふる所酒の湯は墓軒にて高から代わり細雨薄暮ふる明
れば二十畳宿を出で井佐野を流れ光山醫王寺に
詣ず飯坂より北の所の西に行り
寺は長くして業然ふるが旋前に佐義経手植の虎尾松、芭蕉
の句碑、豊前詩歌の碑などあり。又堂内を通し寺宝を見
す。義経の大刀、直垂、薙刀、下馬札、大般若経、佐藤前伝

が射て殺されし殺生の箭鏃、朝倉忠信の時の殺されし
藤左衛門、佐藤家を用ひて雄朱の大椀別に鵜城を作藤
氏花城の書画掛けり
再び歸りて飯坂をすぎ桑折を過ぐ朝来の雨みなぎる路上流
深にして脛を没せんとす小山の谷に岸の花今を盛りと咲き
畠の麦の菜の花と相映して一目悉く黄金なるに離に落の
晩梅は今猶ほ全く散り終らず紅白の桃色を競ひ山櫻の霞
帯びて濃青の雨後の風景実に佳絶なるに山の麓は愈
濃かに水の碧々たるは正に張れり又桑折を過ぎ再び御陵松
の陰に一憩す

半田銀山事務所を訪ねこゝに学友赤倉貴野、高橋、菅
野、島野大蔵の諸子かねて待ちかねて一応見
し電氣機械、精錬場などを案内し見る坑は三ヶ所ありと聞き
しかりしも見ず此(はれ)般の事詳記するは立を共人に望む(ぞ)れ彼等
又は是まで霊山の麓なれども常に大法螺吹きなれて方がせや
がて別れて歩む
小陵を登りて大峠を登る頂上の一本柏標とし七曲の馬道うね
くねて登る頂上にて見れば信達の平原雖曇中ゆ裏り白蛇
の蜿蜒たる如き阿武隈川に沿へる西方一堆の赤土山の隆起
せるは信夫山なるべく実に曾遊の跡猶り人を忍ばしむ惟い

羽黒百俚俗称中原村木岩
並村木岩実、荘距渡瀬村
数十地、且百姓謀本部編
纂地図至此四大誤ら矣

霊山の峰の花は登詣年嵐の中に埋没して今はその影
さえぬ

登りの路は嶮しかりしも下りとなればほどう苦はなく三里
行きて大道に出づ左は東磐城に右の道を取
りて岩城の道を行き常に深谷を隔てし又三里許小名
宿、郡菓数日滞留し猶ほ宴を存り相見て歓ぶ二集
し、村木岩は此道かなり宿の者に尋ぬれば此より三里許東磐
城の郡の路の中なりと聞きもらば又路の左右に分れ遠
くまじと云ひしかしこより信夫に出ずるとき知らざりしことなれば
しかつれと今は唯悔みに悔む

浴場は屋敷半町許の処大岩窟の中に行て湯は少しくき
こなまが変るゆえにして一体はぬき方なりと云ふ浴室難皆宜嘗す
ること甚し

二十五日宿を出で野に送り来て石の多きに列なし野脚疾
大なる起りて歩行を苦に止むることなく白石に列なる是よ
りは皆熱海宮永野を経て遠川に出る
遠川を出て蔵王山の馬場の下を流れ渓を分て猪苗代
山路にかゝれり上り程に前に登山せし道を見て俗
の渠の数を見下しつゝ本九まがりと云ふ怪しを難処殊に雪の
残りを上を謹み下り幸にあやまちなすやぐ峠とまた

こは花咲山のつゞきなる実山の樵夫に宿を乞ふ
四方見あぐる山近く嵐のめぐりたる間み前は以前山なれば地
獄大黒なる峰とさして雪を表土壇に濁りの流れこれ山腰を
まとひておしてくつまをとゝ岩こゝまきつゝ自然の琴調をなし
身は口伝境にいるの想の外起る
浴場は河原に二三の板わたを建てゝ湯はうすゆく手先
いれゝ氷のつゝなるゝ一きめはたしかなりと思ふ一浴し程なれば道
はいる

三、有耶無耶

二十二日朝雪折しも嵐吹きて雨降き大霧谷底より起り溶

溶として空濛々を辨ず物見岩の上りしと一日景の見べきなく
急きて下り青根を達す翠嶂館上學友二三名行り歌詩
を交さりしるい崎無名なる岩駿を過ぎ岩かゝ依宿
天狗山余等尾して行く
登ること山路凡二里積雪特に深く雪上臨時の道を造り近道
なれども雪なる所は泥濘滑りやすし仮寺助陽
の境より雨益猛烈風として奔雲滾々一拉一抑隨間隨
隙沼塑として四面皆合一乗風巡峰巒岩嶂畫く雲煙
中に埋没し山老形色模糊有無の中に行り聞く少は脚底
遥に奔流の粒と共ゝ雨はパラ〳〵しかき面を撲ち眼

鏡為り高く見やらは千丈の岡の如くの行に隨ひ恐れ
大瀧の中一條の山路を深へ其上を行すぐ少し時雨降
し人を過ぼし風と此路は險岨を登り程なく天気要か
し故に大なる岩を覆へり
有馬無動の開地は前野上鑊の傍に歡喜堂
つくりの所と云ふ今猶は古岡と昌中よし東鑑に文治年
月十日大小屋(豆は乗折屋なり)戰敗れ生捕国衡大閑山を
渡りて生捕にすかむと欲すと雖し地の利なきに依て
この未し人の心もなきやと問ふ所に見けやうやむやの事
すなはち山なと岩蔭の間をしへらて人とはなすなる 土御門院 後鳥羽

雲ふかきとやとやとりの道問へば答へぬ人の山ぶみ 宗良親王
げにや名ぶきへ迷ひ大雲の間そこと定めかねこ山かと隱れし
去にし
嶺を下れば雨なし路は絶壁なる匂配なし自然を山の形の
方へ下りた名所なりし馳せ過ぎて嶺つきは日暮れ程
なく山は路日暮天なりし雨は一滴降ぐとふ
二十七日山寺の面樣なし石橋の勝を詠むと欲せし雪猶深
く道無きよしして歌みぬ石橋は山寺の東凡四里雲深し
て上るよし途の中は奇絶なる大瀑数こ行又天然の石
橋なるよしそこ山のけしき、燒き石なる三組の林宿の主より

りて想像の中に駐杖をしぬ其方角は何処なるか定め難し
扨地図に依る能駒山のごとくならむ歟
皆歩行せし里数僅に三里不橋失敗の為め銃氣俄に折れ
空しく引き返すに曾て此峠は明日に元せと午後宿る

四、二口峠

明くれば二十日朝来夜雨濛々時々霧降る峠の中間
俗に霊蹟と云ふ渓流の間奇怪不実高或は偃
臥し或は立つ所の景象自ら奇なり頃に迷ひ横
雪深くなれの跡路を塞ぎ雪の上に印せる鞋痕によりて
略ぼ路を知るのみ

峠下には二峯聳り一は清水峰（三千三百三十七尺）と云ひ我が
辺にして他は山伏峠と云ひ山形の一峯来る遠行西道佐倉
市場に二日を費やす
是より下る路の景色更に奇なり盤神岩と云ふ岩
跡志と式内の書に記して
蒼崖相峙翠屏金相並上有青松紅樹下有屋面流
渡層層峨峨数峰剡立凡千餘町濃雲常
生於足下冥霧長鎖於面前空間山壑擁断崖
峭壁摩峰遠長流渾與人境大異也
とあり毫も誤なきものなり又同書に

是裏時有人不詳産何地為白盤次郎者白盤三郎
容貌魁岸性好田獵常在山澤疾走輕捷跋渉峰
巒深洞恰若飛仙因以為地仙焉志津賀岳陸
後祀之為山神仍稱持法山岳曰盤神山其山西曰陽
盤神其東曰陰盤神山頂曰神祭後事以其遺緣
置于最上石寺洞中以祭之所祭日天陰雨晴回顧寒
或有坎代不者甚聲心數頃人談笑震林木而上昭
示童地則(聊)無見之者矣或偶然遇異客于山邊間
忽然失此在西不知其之所如或奇怪往往有之蓋魑魅
魍魎之類歟寒而傳云爾

さいひ雲居上人の詩
人傳萬二萬三郎　兄弟曽茲伐鬼王　山下清流湛定水
巖前怪石自神怵　雲壁耳呈嘉瑞　異鹿留跡現吉祥
高嶽深谿幾千月　白老樟柏影蒼蒼
きしふる見る神仙の霊蹤　自ら此邊の地ゝを知りしかな
里野原を過ぎ例の石動堂の傍に大巣を見る余は爰に三度
目なれども別に事ふるかに記す点ゝ石跡者中の一部也
在林中参鬱之地直下十餘丈執拗練如紊絲白玉
砕石上四珠跳水底山上獨青松河中交紅樹對叢色
碧名非自境千尋錦屏畫展蒼壁萬丈銀河業翠

遠者所佛十蓮山中之奇觀也

馬場より一愛子の生で雨の降る泥土深き里道を辿りつゝ

世ひ降り降り十四五町道一日の中に地せ仙台よりはじめて温

泉の頃なり此少佛より雄勝に飲財布の底まひ拾ひ酷しかる

一旬一蹟の記

一、出はじめ

明治二十七年七月四日無事大試業の終りをして国文の科目を終りぬれば直に旅装をなし傘大の笠を戴き傍の金剛杖携へ脚絆草鞋とを堅めて延引きまとひ悔まれすに諸友皆吾が旅行の迂遠なるを笑ひ又服装の異様なるを絶倒しの去るを聞き一詩を賦して煙に留む此時吾実に身上に些少の差障りしも好奇遠征忘れ難き予を驅りて快快。征途に上りしの意氣軒昂。歳を卑晩し神魂

傳聞場よりる雨甚し十時十分風雨やがて一走し直に
五城の市を離る車中より望めば挿秧正に終らんとする新田に水
へ雲の影うつし雨脚の如き嵐氣漲ぎて蒼茫たる濃緑
の中吹き来る蛙の聲を聞くかと疑澤畔者城を指す
の間に望み十時塩竈に着し車を下る
例の坂路を越して松島に向ふ海面見せば一白の雲
煙糢糊として波頭を蔽し其間に隠見する青螺の影は
紗を張れる美人を見るが如く一抹有情人を悩殺せり
尋ぬ一巻の遺しし松島を想ふ時に終風一驟松柏風起し
急雨灑ぐこと矢の如し食事をして去る

野蒜に到る鳴瀬の河口に行り往年の築港の事跡感慨
今尚ほ甚蹟の存する行り川の両岸に立つ煉瓦の柱の好えの
まに殘り行り敗壊する修理費幾百万の黄金を一
擲する紀念として宮城県人自ら之を者の為に泣き仕
事を同じ山とすれば白鷗無語青人飛ぶの意
不考にして路を問ふ曰く二路に一は自山麓に沿ふて有
近しと乃ち之を取る道は狭くして蘆荻叢生し塞ぎ
風雨四囲世界の軍なる実に厳絶の情を動へ難しむ海
朝の沙隠を隔て遠く響く波の濤中時々大の魚の潑刺として
躍り蘆間の蟹の遠ひ生を我が路を横色する行人毒悪

なる一種の色彩なりと為に離れしこと数回 昨日陰霧空濛
驟雨に遇ふ 不審に耐へざりしは夜時半行程凡そ十里
七月晴 石巻を出て海岸に向ふ 皆空晴天色俄に霽れ朝
暾輝くことしばらく 遠山猶ほ夜来の雲を帯び濛々として
眠の醒めきらぬ如く 両際の沼蛙聲の騒ぐ中 路すがら此
山の波光を隠見す
二里 廣渕に達し又一里 一岸を越せば鏡盛の湾漲して麦畑
畑を見る 地図を按ずれば是れ廣渕沼なり 路甚だ迂曲
実見なきがしきのなきに伺ひ行くこと三の途まならず午時渡を
達し更に一里有半 小牛田に入る 此日皇土暑熱人を逼る

瀬峰に向ふ 田畑を過ぎては大道なれども其区は平原野草花の
中 僅に馬蹄の痕に依りて判別し行く 横横として交す
処路多く路を誤りしこと幾回なるを知らず 昨日瀬峰より涙
雨を冒し一人同行は雨を厭はしく時時持ち来たる日傘を量
て参るに到底達する能はざるを如何ともなし故に徒歩す 迂
て瀬峰同宿の中五人と共に停車場の方を見れば清蛟標は一
瓢を飄れて弟を待つ者の如し 乃ち候ちて停車場に達
せきる 去所の所よりて流車の南より来るを見 更に五年然天の
如く馳せ停車場に至れば時已に晩し 矢立着するこの日
吁流留一聲 恵土之しとりぬされば乗り収れて失望する

羽黒寺此年一月余日新浮歩向青森至鳥海山麓大雨連日甚国次洪水余僅免災滑川流以此時死

此寺初心の者とうらねば悠然として去り一逆旅に投す

翌日午前四時仙台の汽車に乗し一の同宿に向ふ車中に平澤滑川の二友に別り快晴の遠望を知らんと欲す同宿に着し予独り車を下りて相別る

余滑川を見るに最悲しと彼岸者して仙里横手に在り仙大水の折逆に水中の鬼と為りし記して此処に至り黙然として者良久し

中尊寺時雨川の滑坐に此路を追懐し長歩短嘆打過さし一里毎の木標に道程を数へて前澤水澤を経て薄暮黒澤尻に至りて宿す此日午より雨降り杖に入りて歌を吟撫

羽黒日実現

滑滑に終り此行程十二里

十日横手村に従兄を訪はむとし去りて此驛に逗留せしが

遂に其宅に至る此日雲天四山の雲色漠々たり

二、迷ひ路

十日、横川目村を出で間道を取りて花巻に向ふ路又荒野野中に入りて絲の如き細道四通八達しいづれを定めず難り合遇ふ毎に問ひ尋ね行きしも緊要の分岐点にては生憎に人に遇はず

遂に松並木ある大路に出で何やらん昨日通りし処に似たるものから怪で問へば果して然り而して横川目村を去る僅に一里半の所

なりとぶらきてこゝより花巻へ出て同道やとけへば来
まひし道こゝ元れなりとぶらて怪し笑ふに此方全く失策せし事
り悔むと限りなく又同道を取らんと思ひし心失策を雷潰
しては取りかへしはかゞと勢ひる我慢の張無理を推し込めて仕
方なければ
雨ひ黒澤尻まてこゝより花巻へ
同道を甘く行きたるなれば僅に三里の外なり花巻黒澤尻横
川目は等閑三角形の角頂をなし其間路程各同し要ふに
横川目より来ひて黒澤尻に出てこゝより盛岡の道は全く損失なり其
間弦まて四里半
蓋し前を述べし如く餘りに人と過はきりしも同じ事なく便なく
且つは朝来曇天なして日光よりて方位を決する得ざりし故
かくなりぬまし大失策をなしこゝなり

三、盛岡まで

花巻より三里不馬谷又一里半郡山より宿盛岡まで
は僅に四里半なれば行けば行くべかりしかはかりの志抑て心
配の種なる脚疾猶癒へねば七分を費し三分を減ずるの主義
をもて男ひ止りぬ行程十二里
此日道に見る物なし石鳥谷の前に土佐御歓世音道又郡山
の谷に志和理別神社せーん社方御書跡（及ひと見るれば式神社
は延喜式神名帳中に載せる者なりと）などの石標ありしも見るべき

程の者ゝは居まじと獨りきめて空しく通過し其何物たるを知らざり

七月九日 松巖木の大道四里半を一番に馳せ盛岡ちきしは午前九時前なり盛岡は去年縣治の在る処人口多く戸数四千餘の繁市街は東北の常として清潔なり市中を大小路四筋の国旗萬戸の軒に先づ目に付くは仙北町と云へば一大旅館の前に負受親王御旅館と大書せる高札打てり巡査五人番せり試みて請ふ

明治橋を渡り最も賑なる肴町十三日町を過き櫻山神社の麓なる一隅に舊城内に入れば諸官衙門一係人の持て難す石剣櫻果して眼を驚かしと一見し公園に出る此処には二三の小池

此園中樹木鬱然として山家らしく見えも言ふに足る

松視社、物産陳列場なり

夕顔橋を渡り味噌漬を渡りて南部富士の尾顔を揮しかねたりの登攀の念更に湧て潮のごし

四、柳澤

此原町を過ぎて国道を行こと二里半路の左傍に去年神社の石鳥居なり是より左折し柳澤と云ふ去年山麓の小村に向ふ途は曠野中にうねと赤鳥居の処に立て仮板迷ふことなし一牧童の数十の羊を牧するを見て新らく完へ行く

徐ながら老鶯の杜間よりなく杜鵑の雲外に引ぶ雲雀の
天上に囀を初て竹を砕らかなる三光鳥の日月星辰を
り澤邊の蕪子花は空の紫に笑き一栗の花は上に開き一
丘は全く白し(ヒ)(ヒ)(ヒ)(ヒ)は蛙の誘聲なり
柳澤は二十軒足尻の小村なれども茶屋山の迫迫坂軒
の旅宿なり我しは霧伴が枕頭山水中に言せし生家
なれども彼の書中記る所大に違ひ茶し持ち来り
給仕せし女は暑はちやんと我ら居室に搬び来れり大に改
良をかへしの歌は行程十里餘
實の中に蜜内者なり頼み置き明朝早く出立の旅に夜

明より雨蕭々と降り止なり
十日、生来り御使の三時なれども起し矣ども雨なれば行
ゐやと問はに成程風雨頻に烈しく戸を打つまなり彼枕
頭山水中のこと未細に憶ひ出るものから一日を延ることを欲し
りて来りし馬夫を帰し
が雨猶歇まずと降りしきる
事日は讀書に費し行李中嬉戯紙莊子部ばかり)筆足日の午
眠の醒めぬれば鳥聲嬉々として啼り見れば一天奇麗に晴
れ渡り日影さら〳〵として照り昼なれば明日し受合迄留世
し甲斐ありけれと獨り笑ひ一人ぬ

一日ゆえにて驚き開せし故に駄借りして出でたるこゝより散歩し
村落なる農家山道絵所にて詩の山風陣鈴堂を撼し
自ら釣瓶として鳥の仰ぎ見ば巖峰六十仞高く雲漢
を過り夕陽を背にして紫霧を帶びて鳴ぬ

五、山巖手山

十日朝暁を以て馬に跨り馬夫ひ牽引て十二歳計なる
少童を案内者として住ひ朝の光りに先ち出て孤野
なる山は猶ほ雲を帶ひ陰けに起きやらぬ氣色なり
べて豈野にして野花の露を帶びて馬蹄の下に開きそなた
に哀れなり

馬道に引りて馬をかり荷物はくりつけるまゝ此待す
年頃まに降り更ひ馬夫に問道を取り沼角を行かむを思
ひなり
こゝより行く路較はしく忽ち深き谷にて是を下れば小屋
りこの谷より樹木森々として繁り茂ひ暗くして日影通ぬ
程なりしかも鐵鎖にて大巖の間を辿ひ上る
吾は山三三日前より脚腰の氣未いまして常に攝養せし
拙こしさ結果なる仕業としてなりしも好奇の心は驅られ遠
征の途に上りしとて路すがらなるゝと歩行日の食物を節し
さらむには自然轉地の方よし協ひ程なく全癒すべくなど

思ひたちしが、拙き我が旅行なれば、里人の危み、岳人の怪
しむことなれば、心臆して危み、実は富士を以て試験とせしなり
然るに昨日より日々の行程十二里ならば概ね天気悪
しく濃霧を感ぜしこと甚しく、拙僧は一日滝留せし折柄
猶く張れて水気なきを見、心ひらけしが果せる哉
時絶嶺より来り蹈む足の愈々里々毎日行なる心
の波動劇しくなり、血液の運行急速になる者有
甚しきに流る汗は絶身に沙り佳水を呑むが如く、呼吸
通徑し一歩一歩半の高きに登るに、嶮なる路は岩々ばかり甚しく嶮なる
に案内者は遥かの先に行き、我人恍然と歩廊を慕して

暫時蹈に神気茫然として死しなる者の如く幾度起
るもまた通に起て得ば天下の名山巨岳を跨ぎ
の高根の三度かけまでせし身の疲れは何事ぞと悟然と
して身を起し急き馳せて案内者を追ひ行かむとすれば土
石の間は唯のみ鋭角の刃の如く足を刺す人々はさぐ亀の這
ふ如くしばしば杖を地に倒して心を緩めて休むこと幾
回なるを知らず千歩に一憩五歩に一憩と苦しき
をまたに呼吸と循環の劇しきを以て極りなく
しまいに死せむなど思ふ程なるに案内者は餘り
遥きにや訝りけむ馳せ戻り来るよし同じ五十日間

きなるる詮方なくかりくの途中なりとゝへば彼流石に国情を表しらぶ小童の知恵足らぬを笑ひて折角に上り詰ひしに世めては絶頂まで登りて直ちに降へと宗に苦心奮発してその気に乗り道の程四五町知れしなく一里ばかりとなりぬ

こゝに疲せりとて代馬、病みたりとも平生の健脚を以自ら誇りこの無なればなびく行き得ぎるつこゝにのらむや南ひ起て切り崖嶮の道さやり行し脚力脚力全く尽き全く気の働くなめ

陽は半上に傾けり迫まが中さまの気も今は絶へなむ計なり案内者無かりせまを情れや思ひなむこゝは人の行らなに眺望なれば陽は撫ぬを見して魅みあへなど思ひ切り斬付は見つゝ行しに行未の事思ひ出で果敢なく孤なり

八九日里甚間に塔を立むを宮ゝ山の数二十いくつ出に迷ひ勝なるまじくに平地のみなき佐らむには旅行出るに考急しなど思ひ先の東京に帰りて俗の矣魅に治し三四年余東都に住りし脚疾に罹り折角魅ぜり早く全癒しさらむには再び行を路すべく何方にとゝ定め或は西の方にと帰省せむを打案し愈さんと定め帰心一段して潮の湧くがごとく矣のなして歌の難きに山坂の登ること

今は苦痛の先知せらるゝに堪へざるまでに至りぬ
傷まずは幾許かの案内者に同行まもなく案内程も見たる
かの富士の胸突八合の峻厳極まりなく見たる彼の二回の登山の折
七年後の夏の頃進退極りて案内者に太縄をもて釣り上げて
もらひ漸に登りしことなど思ひ出でられ吁なつかしき思ひ
り帰らんを止むる案内の言葉を無理に導かせ苦痛はいやなれど
遂に帰へ(ら)ずして東京まで(る)ればの神気再び勇ましく
身は進一大魔力を感ぜしめ猛然憤然として皆打ち忘
れ足元定まらずまたび幾度か絶壁を過ぎて馬夫の待ち
受る馬迄しかつきぬ

馬夫の怪しみ問ふて曰く何故に早く帰れるや答へ馬上跨
り柳澤まで案内者と物語深く謝し世年の田舎
期して別る
沼宮内まで行くかまりし盛岡まで行けと馬夫に命じ急げ
と答へ夫れ迄来しまう路を行き大石田盛岡停車場
に着きしは一時過ぎなりと汽車の出るは午後五時の為ればそれ迄旅
宿にて午餐しやがて汽車に乗る

六、南帰の恨

十八歳にて歩行中汽車の中に友人野田鶴男の居るを見付て
共に奇遇を院ぶに堪へざりしかば此時し彼の家を訪ふを云

羽黒山為修験行人世界第一菊読此堂無一点曇時
涙下哉

いと寒き故彼方さく怪しみ問ふに
なほ何れ世は生げ知らぬしるきもなき様とこそひこしらへつやうて
吹来れば流涙ひさ彼の乗る車は北に我は南に生死越とし
て捨き生て此島中無宿人を歎く霧深きよ
然れ共仙豆に入る無宿そなるを故に酒屋場の陸奥国
にきなるき詠して涙りつ
明しは十二日旅行用の服装も今は用なきに持ち運ぶは不便
なりとて朝六式を訪ひ事のよし告ぶ書く預けおき帽子
とか鞋を購ひ平然る宿なり年吹の風雪よ楽し南の
方に向ふ式和宇都宮に泊し四十三日午三刻東京上る

西游小記

一、舟車千里、凡二十九節、

歸思勃然、

一旬一蹶の危に遭ひ北征の行半ばして帝都に歸る遺憾極り無し瘴毒侵す數日病差癒の醫或は勸むるに轉地の事を以て歸心爲に勃然り短長の音驛千里を隔つと雖も文明の音舟車の便有り親ら歩を動かさずして行を得べし乃ち其意を家嚴に通じ談否を問ふ未だ數日を待たずして家書に接し急歸省すべき旨を報じ事を結束して程に登る時維明治二十七年七月十日なり差手余未だ錦衣を着けず曩日題桔の宿思

に愧ること多し

京濱

車新橋停車場を發す森林灣頭白帆の靜に浮ぶの処六郷の長橋神奈川の高臺屋屋見る所と雖も造化の文章一回は一回より新なり車横濱に達して少憩す是より程遠き間某山某水皆余が少時の紀念なる者聯想油然として生じ来る

佳品

平塚大磯間無數の稱松白沙の上に立ちて処処府津の遠海上三原山の烟りを望む処行くに隨ひ官道並木の間より一角の芙蓉を望み萬里の函嶺眼前に在る処要するに皆佳品屢經る者は益々深く感ず盧山の中に盧山を知らざる者函嶺萬里

濱車松田より峠嶺の裡を隧道を過れば必ず鐵橋山岳峻水態激境倍幽峭車行遲遲として牛歩のごし車窓より俯して絶澗を瞰る一水碧玉を布れ箭の如く瀨に鳴り右を轉ず兩三の漁翁淺灘に竿を延ばして香魚を釣る彷彿として畫圖の中に在り山風颯颯として萬木搖動し飛雨霰のごし白雲疊々として景象幻動す

賣氷

到る処停車場氷を賣る者有り皆天陰冷氣秋の如し之を買

ふ者少し

御殿場

東御殿場に至る頃天晴れ夕陽微光を漏し樹木皆濕
空翠色蒼々鮮なり一望平遠直に富岳の麓に接る岳は
僅に半腹以上を露はし嬋娟の全容を窺ひ能はず佳人の嬋
姿を含み長袖を翳すに似たり

紫英寮

沼津を過ぎ富士沼を隔て岳を仰ぐ雲煙風駭し萬仞の富
岳東空を排し来る爽靈淑秀の氣我が眉宇を衝くを覺
夕陽嶽背に落ち紫霧漠々圏内空中に拉て蝦蟇を紫

英寮を繪く然時此景描く能はず然れども數と見る所金は
幼時に既に見る年腦中に幻境として存せしもの此に是れ今
幻は又実となれり烏乎游仙の跡徽として存す此は是に
乃ち非知る山靈亦吾窮困を憫むや否や岳麓の村落
炊煙萬縷東に雲となり此の丈人を包み眠りに赴かしむ

三保

東薩埵の麓を過ぐ清見灣一面の水は暮潮滿ちて明
鏡を湛ふ三保の長岬煙霧を帶び糢糊迷離の中に隱り
清見寺は近く龍華寺は遠く暮色漸く深く皆仔細に認む
る能はず羽衣松下の風は疎濤を吹き漁翁數聲眞に

世て郷愁のみ

追憶の情

昨は觀風の客となり孤帆飄然此山水に吟嘯せしこと數日倘
ほ勝境を探りて一し殘す能はざる日既に心水光山色濛
々たる中に指點する能はざるは追憶の情に耐へざる也

客懷

夜濱松に達し車を下りて一旅店に投ず滿街の夜氣水
の如く女團扇を手にして漫歩し涼を見る樓檻に凭り
微吟す風鐸聲殷々美人を天の一方に望むの又客懷悵
々枕草の上眠を成さず

濱名

昔早朝復た車に上り程を續く、程なく濱名の湖畔に來る一
面には大清山立し潮風遠く萬里より來り曉涼を送る一
面は湖光盈々明鏡を揩ひらく湖畔の緑樹輕靄
に散ず湖上の布帆旭日を受け檣頭十幅の紅を染む湖
岸には平波拍ことして白鷗時々起つ或は陸上車行石々の聲
に搖きしも滿眸名畫の如く而かも雲嵐の滅沒するは畫手
又筆を擲つし特に輝峰以外に拔立する富岳は儼乎と
して而かも莊、神趣言語の外に在り此地に來り詩客の眸靈
るところ、但し名吟を称するを余未だ之を見ざる也

小詩

車中南人北客雑沓し喧噪囂々と共に語るなき者なし凝坐して詩を思ふ名古屋に達する迄小詩九首を得たり

参州

駿遠既に過ぎ街道第一の絶勝なる富士は顧眄すれども見る能はず参州の平野渺茫として周囲小丘圍繞するを見る岳師竹磎先生詩に曰く国在山圍潮打中、不知何処生雄霸圖已矣無人問矢矧川実千里風と此地を今川氏の鎮せし処、徳川氏の興りし処、当時の遺蹟歴々として見るべし唯、親しく憑弔するを得ず高に此詩を唱ふること数回

名古屋

楊柳城下曉風殘月に過ぐ今腔清爽の極、天守閣の居然として天半に聳ゆ城外、郭の内外人家白壁鮮明なり蓋し前年震災の疦痍癒へるのみ(而如)若干個の烟突は黒烟を吐き轉々繁盛を思はしむ

尾濃

尾濃の間車中列に居るべき者なし車中の人は常に礼儀正しく今は生々言語を耳にするのみ車中一〇〇〇人能慶雅妍衆目皆注く或は耳語して曰く是れ楊柳城中有名の○○なりと

藍川

大垣岐阜を過ぎて藍川を渡る大旱なるを以て水涸れ車抗れり金華山何れの処ぞ十八楼何れの処ぞ車中識る人なきを以て問ふ術はなし

関ヶ原

尾濃の平原此に至りて縮る恰も囊を約したるがごとし而山峡帶し天險必爭の勢をなす東西西軍の大決戰をなしたる固より宜なり古来壮士ここに来りて憑吊する者数を知らず然れども鐵車載夢度関原とでも云ふべき今日の有様にはたゞ思ひ及ばざりしならむ忽然として秋風樹を撼し金鼓の響きをなし山雨沛然として羽箭の飛ぶがごとし

長柄の橋

琵琶の湖邊に来り一鐵橋を過ぐ左方に一長橋あり所謂長柄の橋は是歟是処も亦古来詞客の敲賞せしもの車行たゞ速にして十分の景象を領略するを憾む

琵湖

大津に出づる琵湖の全景一望の中にあり四山の流雲翠を銜み湖光と相襯映し布帆煙霧を孕んで茫々千里他年機會あらば明月の扣舟を此に浮べ桂棹蘭漿空明を打て流光に泝ぐべし

西都

三十三峰雨を帶んで糢糊霽れ、多少の塔影其間に隱見す。自ら佳趣あり。昔時夢の如く十年を過ぎ、人の知る無き金碧の浮圖依然として存す。好し、西三年の後を期し錦囊を提げて再び來らむ。時に斜風細雨漸く收り、夕陽一線回都の樓閣璨然たり。

大阪客舍

飈輪飛ぶが如く忽ちに止り、車掌大阪と呼ぶ。身は已に梅園停車場に在り。直ちに車を驅りて安治川橋畔の某旅店に至る。西航の船を問へば、時に明日を待て發せむ。すでに遂に延て樓上に富せしむ。

納涼

夜散歩し市中を巡覽す。橋に納涼の人を以て雜沓せむ。計り河上樓閣の燈、河中畫船の燈と上下相映し、更に水上に映し千個萬個煌々然たり。細腰輕裳の婦女圍扇を手にして徐歩す。歩々金蓮を生ずるかを疑ふ。柳樹の間、初月纖々たり。眉を描く姸態又愛すべし。街上賣氷の聲、少時絶へず。

蒲萄酒

余性酒を飲まず。動もすれば暗雷人事を辨ぜざるに至る。今夜屑に蒲萄酒二罎を購ひて歸る。蓋し謂ふや、不快を

覺める時は一飲して眠を買はむと、昼より先病間醫飲を禁じ酒氣を渴するの故を以て即起半罎を傾け盡し頹然として醉臥又一快適

半日無聊

舟は二十日午後を以て發すべき筈なりしに半日無聊樓中に坐して遠く部外を遊び名勝を探討する程の暇なし一枕華胥の夢を結び僅に閑を遣る此日快晴暑氣燦然たり寓樓狹小風を容れず暑氣炎蒸の苦罪なしと雖生の享を受く何等の吾德か午後二時頃毎に乘る下等は不便利と見て故に等を奪り室廣敞なるを以て十分に偃臥し得し

舟は午後四時を以て發す

月遲し

舟は安治川を出で天保山を過ぎ神戸に少憩し兵庫に和田の岬を經て播淡の間を出づ夕陽水に沈み暮色海天の間に接し波潮無邊清風潮氣を吹いて吟衣を飄ぐ鐵欄を抱て長嘯放歌世塵を忘れ月遲きを以て感となす又

無邊の闊達

たゞ歩々ゝ

九龍

三十日曉起舟は碇泊す舟未だ九龍に至らず甲板に上て見れば沿岸の樹色烟を含み海氣日に映じ洲濱彎環島嶼の布置殊に佳景一望の絶景は名畫も及ばず

じて愛精神為に変ぜんと一客背面の山を指し彼れが
象頭山なりと答へ衆皆首を引いて見る

瀬戸海

瀬戸海中左右岬湾出入し海岸の屈曲頗る多く無数
の島嶼星羅碁布して天然の美を衒ふこと確乎たる盆
に水を湛へ奇石を置き種を置き直して見るが如し海水碧
瑠璃の如く激浪起伏なく平かにして席の如く船体毫も動
揺せず微風ありて海面細紋を畳むのみ花として湖
水舟行に随ひ浮沈し島嶼を縫ひ海間を復
び開けて舟を通ず確乎名家の文章

変化百出
抑揚行波
瀾行舟行速
我動
彼動
従仰
陸奇島
形状亦種
注ぎ各異
りて鶴を競ひ妍を

宇ひ前後左右より彼ぶ一
と連接せる暇なく舟中客
ひ繞く此邊の地理を知らず
者を見へ衆を麾き一指麾
して其名を呼ぶ大體の様は
松島の秋模倣して敷衍し
るかのごとく離し更に一段の妙趣の
あり能く之を賦せんと欲せば左思
十年の苦を積まざるべからず徒
に長篇巨作を為すこと難し優

孟夜冠空しく
海山の香霊を
讀過して止まむ
其日舵樓に
坐ろに風景を
揖し飽る
を知らん嗚呼
其尊何れか然や
這般奇絶麗
の大圖畫有て

存する

赤馬關

山の夜周防洋を過ぐるに波濤
船底を拍ち光し動揺せし難
も暴風とてもなく幸ひにして舟行大
ぐ臨なりて至らんで艙底に臥し
平穏なる夢を結び此暁に至
翌早暁早干珠満珠の中なる島
沛の燈臺一縷の微光を放ち
て煙霧の中に輝くを見る

巌柳嶋、懐古の情

馬關に着せし折隂月水にも映ち海色漸く曙け始めて鎮西諸山
の厚翠を揖すべきを得たり 馬關は門司と一葦水を隔て相
對し若干の島嶼灣中に散點し大に風趣を添ふ 彼の壇浦武
藏の復讐の地を以て有名なる巌柳島の如きも其一なり 玄海
萬里の潮水奔逸して此処を過ぐるを以て潮流頗る迅速殆んど
急湍激流の看をなす 両市相對峙して四個の礮臺何れも以
て此天險を扼す其形勢より考ふるも實に鎖鑰（のジブラルター）とて
奇なるべし 礮臺は山頂に在り其初め剣築せし當時一山の樹
木を伐盡せしを以て露はなりしが近年 樹木蓊鬱として遂
に今は屋も隠見すること無し

生日を以て家に歸る

此日の晴天霽れて碧水と相歡し風和らかにして波起らず
しかも海潮の[illegible]合流を[illegible]偶ま順風行
けば急に帆を揭げ風力を相合し舟行甚だ快し半日にして
過ぎ行く福岡等に[illegible]れむ風景又一變す少島にして博多に
着し埠頭に上り車を賃して五家に歸る家人狂喜して門
に迎へ歡聲湧きて喜氣動く載ち欣び載ち奔り幼孫
雪子初見の小弟嬉語連聲阿父呼ぶ骨肉の情愛
[illegible]此日実に無[illegible]生日[illegible]地に落ちて十九年[illegible]
此[illegible]好時好歡

二、福陵三旬

大歡

余年十三笈を負ひて游学し時に歸省して遍庭[illegible]の辛酸
の秋住堂に歸り兩親家に[illegible]ること[illegible]年、此間余が
一家に亦多少變遷の運命を蒙り薩南に移り又此の福
陵の地に遷る弟暢養はれて他家を嗣ぎ弟正新に生る
今未知の地に歸り未知の弟を見る一種の感情油然として禁
ずる能はざる者実に故ありて菊水陛下の歡を承くること三旬豆
花の離落蟬聲秋を悲び一簾の新月皎然たるの処紈
扇涼を拂ひ一椀の芳茗囲を温ほし清興尽期なく溢る曾

て春濤角の句を誦す曰く大歡全在侍爺嬢一事無心
歸故郷を真に然り余は佳ぶ此地山川信に美なるも吾
郷に非ずと雖も以て感慨なす可し何日か塊城山下に一屋を築き
心家人と共居り二頃の田に耕し天年を樂しむを得む

筑前風土記

永日無聊家嚴示すに一部の筑前風土記を以てし午睡の餘
閑を消きしむ、此書益軒翁の著す処考證精確敬重平
易、前賢の山川景象紙上に躍動せしむ其他太宰府の
歴史の味最も意を致しまる者のごし熟讀數回に亘りて
倦むを知らず真に一快適

海浴

連日暑熱燈がごし午後必ず海に浴し以て半日を消す地は
博多埠頭家を距る數町、與々偕にする者二某佳ぶ海水
清澄なる房南菱花灣などに比せば雪壤霄壤なる可
是小一憾

吟我

八月一日宣戰の大詔下り是より先き王師海を渡り韓山行
り牙山豊島の捷報相踵いで至る士氣高に揚る私に思
ふ雅頌の正聲を以て聖代を謳歌する又報國の端を可
し餘閑有れば吟我す然れども幾なくして再び征途に上る

故郷に錦衣を貯へし事を思ふ

中島橋

福岡博多の間那珂の流れ一長橋を架し中島と称す清夜涼を追ひ此に来り橋欄に倚ること多時芙蓉峯潮光正に漲り橋下の水漫々たるの時一輪の明月油山峰頭に上れば金波穆々として中に圓影を浮ず両岸の樓臺叢竹に相連り笛聲絃響断續して水を度る清高宛轉として幽婉無等情人をして雲時清魂の思ひ忘れ怨ずして水中聲有り波光又幸く知る是れ何者ぞ遥かに是を得たり大魚人を躍せし者非歟

舊城

舊城は市の西南隅に有り今は歩兵黄聯隊の駐屯する所なり昔し規模頗る廣大築城頗る堅固要害利禁に乗ずべし九州第三の堅城なり樓櫓堡壘既に亡ぶと雖も女牆垣柵孤然として當を壓す以て當時の威風を想像するに足る余時此邊に来り濠上に於て晩涼を趁ふ

春好

郭外を行き往日吏隱の船橋せし地なり淡角曾て句有り吏隱裏成村蕭然春好処疎籬不護花 夜蝶 時未去

と、今は茅舎此畔に敗籬頹屋、文彩風流全く一夢と化し去り、雨濕天陰徒に社宇の叫号を聽くのみ。

住吉

住吉神社は遠く古代の老樹森々として廟貌荘厳、寶物じて古器珍寶若干個を藏す。

公園

二つあり一は東公園、他は千代の松原の中央にあり、域内廣敞にして市街遥望の景を眺ず萬株の長松濃翠滴々たる嵐氣書昼暗く清氣人を撲つ、微風吹きて笙歌を送る海濤拍つの聲と相和す、眞に養神の好境を撰す。

元寇紀念碑

其建設せらるゝや世実に此松林中にあり、巨石大材既に蒐集して累積す、然れども未だ功を落せずと、私に念ふ此の大寇既に史上に歴然たるに今市新しく紀念碑を建てむとすは宜しく紀念の物を建設せば果如何なるべきか、

荒磯山

市の西端、海濱の中央上にあり西公園と弾丸少しく隔て実に市を見て一方には福岡博多の人家を瞰下すべく一方には妙見岬の東の海岸を一時の中に攬むべし灣中三、の島嶼あり西方遥

かに小美麗を揮ず、可也山と称する者是れ遠しとは志賀半島の法華、近しとは代松原の濃妹、皆從席の物となる眺望の絶佳なる宜遊書畫一景なし蓋軒翁は凝書を指ず、天橋巖島に優れりとし推して天下第一と称す、疑くらなく當郷の念は翁を驅り多少判辭を譚らしめんも甚言は固より溢美に過ぐ雖も一佳景一妙境と称ずべき論なし

櫛田祠

博多に行て菊池武時が一矢を以て龍王の神蛇を射殺し太宰府に向て揮題の時と戰て敗死せしの遺跡なり、当時祠殿頽破し老樹陰森たり當年を追懐して情思黯然

往時の遺跡

崇福寺

崇福寺は黒田氏の墓域として、水の墓あり、光雲神社多々代藩主と同保護を見る、其他古書畫、古器を藏す、其他往時の遺跡として剩存する古祠、老刹数しなく、

古物家

市中貴家に江時某と呼ぶ者有り、古物を好み熱心蒐集し之に従事すること二十年、獲る者頗る多し、以て石器、土器、佛像、刀劍、文書を初め上古の玉鏡、偶人、其他繪畫彫刻に等一一枚挙の暇なし、古より数千年、新しき数十年、而かも土

中より獲る者尤も多く数を占む、某は他日此地に一大博物館を建てむとするの宿志ありて喜ぶべく賞すべし、余行て黙捻研究せんとして閑なしと歌む、

市街、

福岡博多無二街衢清潔なること一般に秋陰なり高貴や盛見、人情は確守の精神なる浮浪なる者のごとし市中西三の勸工場あり、卓球は福岡博多多有り、甚だ立派と云ふ程に非ず、海は近傍なれども魚蝦の便悪しきことなり、酒は其地に産する者味甚だ美、夏は暑熱にして冬は玄海寒風来り凜烈なることなしとせず、

近傍の名勝

太宰府、箱崎、香椎等は一遊せしが其他に及ばず油山登るべく人人蘭澤見るべし志賀島には蒙古の古跡を留む宮地嶽および神社あり、也毎游花探討して剩す紙なきのみ、

芥屋河

芥屋の絶勝を聞きしも鳴滝の縁未だ熟せず、遺憾抑なし、後ち小笠原此地に游び詳記して報し来る聊か駄游をなし僅に之を慰む今之を抄録す、文章少しく改竄を加ふ惟ふ法恕を賜はむことを願ふのみ也

明治二十年青土百旅装を整へ学校を出発し、新町姪浜

阿兄人と爲り
神仙の骨あり、
賢弟文を作る
天稟の才あり、
多幸なるかな
一門の人。

を過ぎ生野松原に入る此松林は頗る長く連亘し青松、
白沙の上に生ひ茂り人をして懷懷を散せしむ其より今宿に
向ふ海濱を通り巖石骨立し松樹甚侘に蟠り碧
潮と相映し風景言ふし佳今宿今出元岡馬場の諸村
を過ぎ此より先は山にて見るべき者なく二田間の一本路を過き
行きしに五六町にして芥屋村着す芥屋は海岸の一本村
なり前に渺茫たる玄海洋を控へ大石岬の奇景を以て聞
こる地なり皆風光なく海波頗る穏かなれば一本丹を乘し行
て見る此大石岬は高大なる巖岩より成り二十餘間の海水
上に突出し磯上松樹を散生す而して巖岩の一角部に大洞

窟あり是れ即ち神宮と称する者にて舟を入る洞窟頗
る長くして極まらず先は暗黑にして行くこと能はざるなり 此巖
巖の通常の石と異なるは四角なる八角近く長き石柱皇
なりて成るものにして銅質を含み色は赤褐色(即ち玄武巖)
神宮の左方に洞あり同じく玄武巖にして之を中門と云ひ其石は御柱石
と称する者也此夜芥屋の民家に宿し明くれば十三日又
発し野北の牧場を過ぎ一嶺に登れば四方風景頗る佳
にして壹岐對馬し微かに見る須賀權を過ぎ村に同谷
神社あり社殿の結構頗る宏壮是より三里許にして今宿
より昨日往路を辿り福岡に帰着せしは杜暮

時なり。此日自身運動は今度が初めてにて有之云々

余讀して神馳魂飛ぶの思ひ。寄詩五首賢弟、他日毎を
玄海怒浪の上に浮べ此奇勝を揮ひ、舷を拍て長嘯放歌し
汝と天風の中に翱翔する日のならむ。

蚊帳

福岡藩士の多きこと言語道斷にして日暮に行水つかふなど
幾百千の蚊ふと飛び羽風微かに動し肌を刺し堪へて押
ぶれども蚊なほ我と我身をしらかにさきるなどおのしら腹立て
悪しき又倍す極の下より大なるひき蛙生て来り大口開て之
を食ふ彼蛙は食ひ物多きを喜ぶべけんども萬物の霊長

たる者とそしたまつた者に非ず蚊遣火焚して僅に凌げども清へか
らかりて煙立ち如様にたゝむ又襲ひ来る杉の枯葉しくか
ふべて身をかくすべき所なければ煙我が目より出る涙甚し
渦巻き上る煙の中に月影ほの暗くなりて見やるえ心ぶせまや
幼き弟戯れに魚すくふ網の目こまかきにてすくい取りたる
一度に数百を取り尽すべし茶碗に一杯位を得らん(自注)
とそれなりは毎日くれ方特に一年して世を過すかしてかの熱やこ表
斬時は也方子君し先せくるが又裏りて蚊柱たゝるの如し
行はれ出るこなら一かんなかけ友と思ひけら蚊帳釣て善
家の人は皆東国製なる故自分構造異る所なるにや更に防

く便とはなれども蚊は休ませず故にか自ら目を潜りて入り
蠟燭つけて焼きて中に居り書をよむに蚊帳の内外黒くなること
なく夢も結び難きに漸くに工夫し蚊帳二つ重ねて釣りければ
漸く防ぐを得たり後ち新らたに蚊帳試みして用ひしに是は一
にて足りぬ、ゆゑなれば相は何一つ成きむしなく、たゞ
苦しきことの限りなれ蚊帳を一城郭となし四面に雷をきゝつ
ゆるは実に頃王か垓下に圍まれ四面楚歌の聲に耳驚
しくらるゝ似たりけり、其年は四月頃よりし十月頃まで
り、故に一年の三分の一乃至二分の一だけは蚊帳用ひずはなら(ず)
ぶ尤も吾作し所は中に著しき所と同へしし(たゞ)誠に天下の類(たぐひ)なし(なき)

三、福岡の巻、凡七節、

一、箱崎

福岡より三十町、先ず松原の東に行り、宮は官幣中社に列し規模
宏大にして堂宇壮麗、金碧や剥落するに任せ、徽宗行
社頭に掲げる敵国降伏といふ壮厳なる四大字は畏し延喜の
筆なりと称し筆蹟を自ら人をして崇敬の念を起
む河樹若葉にして霊鳩啼に飛ぶ社の前面に大路あり数
町にして海濱に出づ、ここに大なる石燈籠あり極目の烟波渺
茫として一碧天を連ね、軟風の歌ひ来る音しの風情忍ひ難し
新羅高麗拓植軍に行り、宮ヲ六師海を渡り武を海

外国の強敵当者せず連戦連勝、捕虜を拿きて此の門頌
に繋ぐ白正子迄きに所り、白砂青松浦々を擁し波間に
に鷗の拍こゝゝを見尽又好風趣

多々羅濱

多々羅河の海に入る処左右岸傍に濱の広がり背志勇義
烈なる鎮西武士が墨を揮へ胡元の鋒を支へ国難を救
して死を沙上に曝らしゝる処、尊氏の西走して来りし時菊池氏
が迎へ撃て遂に敗せし処、今や折戦残弔すに過ぎの網に
打て海水岸に囲て歩に鞆鞆の響をなす又既往を追懐
して静かに祖先の英魂を弔ふ自ら蒼茫萬古の情に対へ

名島

小早川隆景の城墟にして、遺跡歴々として考へべし鞆鞆
景色しゝ城濠なと見れば轉た当時の忍ばれて追懐
の情胸中に徘徊するを覚う碧蹄館下に松大軍を撃
敗しゝる当年の雄時の俤を偲へば又一段の想を生
ずる人傑しゝは此海洋洋結通の聲、之明の今日更幾
河の盛衰を如しる又

帆柱石

石島の岬角を繞ぼ一小祠あり磴道を下れば海濱出
巌頭海中に突出し海水之に激して澎湃盤旋潮欧

の白は砕けて散し飛沫雪を注き胸宇為に灑然たり、此処に帆柱石有り、石柱周囲丈餘、長さ十餘間、折れて倒せる海水之を打蝕し其色濃褐、赤黒の斑點有り一見宛も自然の巌石の如し、之を撫すれば木理明かに辨ずべし傳へ言ふ神功皇后三韓より凱旋の時一隻の艨艟棄てられて此に其帆柱倒れて横はり風打雨淋、潮洗ひ日熱し遂に化石せし物なりと其或は然るべきか、往事茫々千年今日尋ぬるすべもなしと、思ふ者是の変事に皆を決して雲の天を晩し今日三韓の風雲苟を想像し豪氣大空に横ふ

香椎潟

名島の山を過ぎて堤道を求めて海岸を歩む潮水縹渺として限涯しなく、快の一大彎を成し濃碧鑑を開く、是香椎潟称する者、志賀島前に対し日沙青松明かに辨ずべし、島中小巌点綴せり、散歩し午霽漠々龍の秋氣清朗白帆影を倒にして往来す、風色の絶美なる宛也て茫霞與旅鷺翔飛、秋水長天一色の趣を成す、

木葉石

此海岸沙濱の間木葉石なる者を拾ふ其色褐、其面平滑葉の状をなし脈理を存す、

香椎詞

香椎町の南にあり本道より十町ばかりにして一丘上に在り宮は
宮都大社なりし境内廣闊四邊老樹枝を交へて茂り生
し森森天を蔽ひ晝尚ほ暗きがごとし森嚴肅穆の氣
其間に漂ひ石階を上ること鞠躬如たり　祠殿は丹朱を施
し金碧燦然たり　輪奐の宏敞壮麗の大なるは稚時より
若かざる者なし　境域の廣遠なるは夏に彼に勝るが
如し　社頭老樹一樹の繞らせし　梅を以て　枝葉扶疎茂枝
に天、いつの頃にやうゑむ　教使の年植せしものゝ由傍に小石碑あり
燈に　祝王の御製の歌を刻す　宮に寶物若干伝へり皆可觀

四、太宰府　凡十節

一、汽車

月光台の次なる早曉停車場にて汽車に乘じ南行す、九州鐵道は所謂輕便鐵道なる者、規模固より小なり、且つ異と為すべきは客車相聯接し旅客は都り若くは二、三を隔てる車輌中を行きそこを得べし便利と謂へば便利なり、雜餉驛にて車を下る

水城

水城所の一にして大なる堤の儀存し其柱石に依れば天智帝の時太宰府防禦の為に築きしの往古此堤皆海

元寇の故事の横濱築港の者を造りて水中に関を設ける者
を思ふ此邊に蒙古将范氏の墓ありと

刈萱関址

迫ヶ谷村にて太宰府より二十町許の処にあり此関は天
智帝の御宇、都督府政廳防禦の為に設けし者にして文明
十二年迄存在しありしが今は遺跡と称するのみにして
見るべき者無し菅公歌に

刈萱の関守とのみ見へつるは今しぞ知る道遠ざりけり

星巌の詩に刈萱関を是なるべし

都府楼址

都府楼址とは所謂太宰府政廳の遺址にして御笠郡にあ
り、数百畝の柱石悉くこれにして麦畝の間に存し宛ら陣圖
の如く柱石の上には圓形の穴起りて明らかに柱の大きさを示せり
傳に都府楼址の碑あり一清しして以て顛末を知らしむ
抑も都督府は又外朝西都と稱し九州二島を鎮撫し外
寇防禦の重鎮なりしが故に世人左遷せらるる者此地に
来り都府楼を眺望して菅公を思ふ故に此地を呼ぶ
号して鳥帽子宮と云ふ鎮西の政廳なりしかば善惡
の理を僅に其礎石を認の時に村童来りて古瓦の破片を
拾ふ人年光流るるかごとく一夢千年昨の淵は今日の瀬

と綴り給ひしなり。

戒壇院、観音寺

戒壇院は日本三戒壇の一にして盛光赫々たる者にてありしを
昔九州に移りて剃髪し仏の帰依せんとする者必ずこの寺に
て戒を受けしなり

観音寺は天智天皇が母皇の冥福を祈る為に建立せし
西海第一の大伽藍にして別院四十九坊ありしとか世代ちはこの寺
厳金銀瑠璃を鏤ばめ光彩燦々たりしが一旦焼失
し聖武の朝に時之を再建せしが仮再び烏有に帰し今は唯本
堂のみ残り金色の仏像十体許或は満面に笑を含み慈

悲の欲容情に秋しむまるものの如く或は此世界に破れ悪
相を凝らし情に人言を虚たせむまるものの如く各種この形容
なしがふを正しく安置せらる是皆一切の天皇の寄進に係る
貴物中山野道風の筆なる観世音寺の額なりは磨滅して読
むべからず又源頼朝の遺物なり
寺前に梵鐘あり色澤古雅なり目今年以上、物と知る者少
の詩に観音寺に聴く鐘聲の行者正に是物、昔年公
冥なりして配所に行くと悲しく秋のうれに此鐘聲も
耳にし心隔九回せられむ此の鐘は実に仏の慈を宣しくるに
に拘らず公の詩百年を傳へ居に此鐘に乗女の事を留

むなしく幸をゝはまし

此寺は古昔九州第一の巨刹なりし彼の都府樓も運命を同じくし今や寂寞無情山河の荒寺に似たり鳥啼夢幻泡影なるかの真と浮世の面影に留るこゝ一所の偽なりけゝ

太宰府神社

太宰府神社は御笠郡太宰府村字天神社詞に曰く社殿を築き、社格は國幣小社なり、古は安楽寺と称し小の遺蹟を存りる一小刹なりしを寺内に公の廟を建て構造製造は此宗廟殿模せり、鈍鳳山紫天神寺号公の遺寺を偲ぶ、里俗の此廟に詣る者一日多人行ち餘多の人家公の遺徳を

てはなを牡丹とゝ、社殿宏壮雅麗彫刻を飾れるゝ御社なり

拝前面には一池あり見雁賀鳥老鶴を放ち池上に大鼓橋二つを架す後方には梅林あり四面には築山假瀑あり、潘西寺あり此も老鶴二隻を養ふ左上に上りて一望すれば四郷連山四囲相連り景色佳絶固る好箇しるべし

社蔵寶物

第一 菅公の真蹟にして字體端麗公人となりを想見するに足る曰く

離家三四月、落淚百千行、萬事皆如夢、時時仰彼

詩を誦する者、孔か文か浜一日行なわざる者、支那三聖（孔子、孟子、荀子）の像青銅にして高さ六寸許二篇真備神子拾び或る学者を元に得て帰り都帽付学校に納めし者、今其他正宗、村正、行平の刀剣多数皆者侯の出陣の前或は戦勝を祈り或は凱旋謝して献納せるもの一挿秋水眼を射る

飛梅、衣懸梅

社殿に對して老梅二株あり冬柳を繞て左右に飛梅と称し左に衣懸梅と称す、飛梅は心を紅梅殿中に行し公の立帰

去るに臨みて長歌を作り東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそと別れを惜みたりしに非梅の草木も霊あるものと見へ遥々遠く此地に飛び来り東風吹く度に笑を匂ひしかば世人太平記に記せしとか、衣懸梅は昔菅丞相左遷の時衣を懸けしとかなり、然らば此梅は菅丞相の御衣なども懸けしこと疑なし

天拝山

菅公の遺跡として此地に存するものにして三所、思ひ出の品は別に記すべきを除く外に天拝の山は、住吉の由但し余は宝満山に登りしとき訪ねんと欲せしに天拝山は二日市駅

の方に高く城址なる連山の中に高くそびえ
き孤松ある一峰なり中山溪谷山麓中腹山頂各
々同じ。俗説には昔大蛇隱せられて夏積る雪地へず山
中に棲り龍の水に齋戒沐浴し山頂巖峰の上に坐し香
を焼ひて天を祈り終夕まこと霊雷となりて岳宸
殿上に落ち吽半を敵き殺しこれ俗人は寄ら山を山を難
して進む霊場なす齋車野今詩章陸附雷峯奇
を衒ひ怪を弄す笑ふべき文憎むべし而して実際から看
りとせば感霊なるべし凡夫の輝かしき駐まるなきむを知て
陋巷淺摹の程こそ衆人の思想なれ山は宮を去る南九里

賀満山

太宰府を去る路を此に二三の村落を経て直に賀満山の
麓につき登り初て山は高しと雖程なからず遠近を四望
の広陵を抜き路や嶮はし樹麓の方々本立なり草生して矣
天に白光を遮さるるなれば日の暮るるはむ方なく汗流れて衣を
濕ほしひさを刃に向かふ又なく心地行し登ること半里許ほして
大島出でこれより上方は峻險いやまさり木立て岩
不木根路に帶りて実元こそ金峯駄をはきくるまにて登
り来りし故大に困難し柳しし風を吹けばやや人心地つきぬ
つとめて登ること又十町許にして一軒の屋に一四や玄山伏の接家を

苑石壁を枕して結び水求むるに六歳の七童今汲み来て進せ
しかば出でて飲きしかば五〇年経てかつて来り水汲つゝ土瓶と茶
碗とを盆にのせて出す試に飲むに清冷にして歯牙透り肉
骨に通り行くが如き心地すこゝより数町の先にて先づ
露の如く滴りて海に注ぐ清水なりと称す家の周囲には叢樹生
ひ茂りて日影もなきが如し渓風颯然として来れば涼しきを覚ゆ
かゝる三伏の熱暑忘るゝ事なし此れより頃まで又十五所許ときこと
なる故ふと此山普しは岩の大厦所々に山張あるが如しこれ戦
国の頃なりけむ高橋紹運なる者此地を選び城を構へて據
守しけるが太閤の為に撃破られ城陥りしとかの岩屋と
土塁とを見ることを得しとかの細川幽斎の日記益軒翁の見
土記などに詳細尚略のしあはれど名しるしなり頃は大岩
多く処々に鐵鎖ありこれを手繰りて上れば大盤石の上に小
祠あり此邊も老樹蔭森々たり祠は玉依姫命を祀る其由
緒は可成長しければこゝには略しるす頃上の眺望は曠渺
無邊とも云ふべく福岡博多の所は脚下に見へ其前には一大湾
内を抱き長く延びて半島を擁し浅島の青螺の如く基
に浮動し来往する白帆の影點々として一望遥天を衝き海は渺々たる
は要ずや廣く玄海洋は渺々たる南
の方は太宰府に南平原に至て小丘山脈ありて真に流後の地なり

嘉麻穂波の二郡にして水村山郭の勢すこぶる雄壮なり又秋天晴朗にして雲氣なき日には遠く三韓を望むべく東の方には魅惟の高峰聳え西の方は脊振夏山新立する為に維持せられ下ふかく其麓なる実に目を瞠せしむ太宰府付近より此山頂に登る路程五十町という

宇美

宝満山の麓より別路を辿りて宇美に出づ八幡宮は神功皇后三韓より凱旋し此地に来り分娩して應神天皇を生む故に地を宇美と名づく境内に産湯の水あり此より雑餉隈を出で日暮れて汽車にて帰る

五、彦山

家に在ること旬日にして又浪游を思ふ興来れば行く能はず意を決して出づ時維月十二日書汽車に乗じ田川に至る夕陽既に傾く小倉迄の車賃は情書しも能はず顧みて思ふに小倉迄の車賃は高くしかば徒の道乗り換へ馬車にて帰し待つこと凡そ三時間隨分と気長き話なり

午後二時汽車にて南行し五十分にして二日市に着し車を下る此日実は天拝山に登らむとせしが かく乗り換へて行く時間を待つべき先づ遠まわりなれば遠慮なく

十六ちゃみ

小樹麓を繞り傍の巨松石磯を飾りて好たる我行漸く
遠らんとしかも霞の中に糢糊たり十二時甘木を発す、是
往事旦暮なる国道なりて到る処櫨畑多し実を採りて櫨燭を
製すといふ
是より半里相窪と称する村を左折し岩原と称する途は強て
坦々たる路を求めて流脚下に在て深く落る崗
上老樹多く蟬聲雨の如し時に渓風一陣吹き上げて竹を飛
ばす洛氣衣に満ち毫も暑熱を感ぜず地勢漸く降起し
眼下に見る渓流は真に路側を走る
翠小石磯に着す是より彦山迄は三里少き故是非に
至らむを欲し急行す二三の岸を辿り日全く没し暮烟
林を籠め樵歌の聲も歇み帰鳥霞を背にして飛ぶ路は田
逕交して明なる所処に出で人なし心地に感ずと
雖も漸して彦山の樹麓に近き宿屋は何へば山腹に村
落ありこゝより彦山は猶三十町許なり弘法池望遠しかも更
に雲を敲して高く月林間に漏れ清光路を照して我を
導く山に六樹多く蟬聲に雲氣鎖りて高く緑
蔭畫を閉ぢ月光又青かむまれ吹く老梟一聲悲
斗すれば天地寂寞萬籟寂然倦旅満目旅情
黙然たり

漸にして島根にいたるところに至る道輪ひらく石階如光にの
り人家多く燈光輝くこれ即ち彦山の村なるを知り漸
く忘し行きて最高嶺に接す霊山の聖ひきて旅
所は宏大廣敞なり山深ければ夜半に流し嵐樵鈴
に響き紗燈輕く動く萬事に不便は無きよりなれど
軍の酒うすく山味野肴佳なり暫上に墨積せるにはや閑
寂しかも虎狼の此時節には却てよしと宮美して夫る
惟心皆金中を水飲みて飯を過さんが為め飯は僅に二
椀きしにすぎず旅一日して衣はみな汗ながれて絞るが
如くなり

翌十日つとめて早く起きじが飯をこねば過ぎやすき七時頃
宿を出で頃きして登る三十五町にして皆石壇つきたり甚石径
なる為め却て歩行に障りなる所路に房舎多くなり苔むしは深
き宮やかに花やかなる跡の思ひやらるる計して風打雨淋荒
るるが流柔に過ひ今見るは七堂朽ちて信宇の五倍に初
心に可成大きやかなる冊宋の飾は剥げ金碧美はあらな
見る目も哀なり明治文明の御世なり往日敬神の意薄く
薄き寺殿初宇廢頽せざるはなけれど此名山の霊福
にしてやくし情なく成るがきるは此に現在保存に尊重する人
しのりとか一日早く修築しき物なり

登り道にして隨分嶮はしく白配坂と名ずけ町の東の方は牛
者峰峰山傾きて欹側し石筍斜に生て元はゝり駒
然じて見上るばかり岸岩峻岩その嶮しきこと近づくべからず上には森
こゝろ老樹枝葉藍天色を侵敬して下には數家茅屋の點在
る所仙人の風致なるべし
羊腸坂二三町他は真直に上る朝鳥の聲林下の烟を破
り日光漸く山路を照らしはや汗流れ息切れすること數ヶ所
4巖壁を穿ち巨樹を鎖し繋ぐこゝ水の音潺々
松の聲冷世の外に響く山国より深し
して塵間の氣候に異なれば、月夏を知らず寺花瑞寺

常に春なす、かゝるけしきにはや數ヶ所登り来りしに大巖數
個嶮を穿ち鐵鎖を掛けり、こゝより先は二三小坂の程
なる坂なり
登り詰めて、宏大なる建築樂にて多くは九本を用ひ
朝早けれバいや安り花こ神主もたしぬかつきて一樣すべ上の眺は実
に眺望世界と必ずの外なく西嶽二豊は眼下に行り東の方には海
を望み遥かに四州の山を指すべく北の方には玄海の灘行り長
門の岸など彷彿として顯る南の樹林には山猿蜜猿錯し跳躍して
東望す中に一眼行り是所謂耶馬溪の天氣晴朗の日阿
蘇温泉二山の烟を天末に望むべしと云ふ雲煙間隔して遠

昼なり霞み模糊蒼茫に暮を書す絵はなるは遺憾とする
所なり
しばし憩ひて又下る同じ道なれども下りなれば難易絶し前
に洋海に吹割しく半ば上りし然る暮歌うたて下る得
べし三十町の頃にて二人旅の者に逢ふ同じ宿に泊りしが其
り聞いて旅の者にして煙草の火を借り昔話して他の中
彼等は根来寺より熊野酒つまて盃は清しとて小
言いひて飲みしなるが今は味の美なることを忘れ流離
神遠にしもやそれは遠きじと思ひ歌酬すること数回
と及び翻しつゝ

芳旅客かり弱き置きて荷物を取り豊前坊高山
の東麓に行てこゝより五里半その間は草原なれば夏
年名歌遠きはなく暑熱耐へ難し漸くして鳥居を見付け
も数町にして宮前老樹蒼鬱として林をなし清泉流
して鳥居前茶屋軒端に湧出し爽涼堪へ難し
翻り霊鷲山は実に深遠幽雅とも云ふべき
羽黒は小倉より秋年蒼しく雲容体然して守宮高く
より細流清流に沿ひ時峠坂隧道を過ぎ
こと数回歩行苦難を覚え渓は山国川の一支流にして走
り耶馬渓と云ふもの是なり数里の間風景よき処にて深林の

青の遠足来たりて遊れり来る七月の祝典を催ふ

る奇石怪巖数丈蹲踞し又は数峰絶壁となる所に
猿田彦と特に名づけ大体のまきは柳川記の山石譚など
に詳記せんかこれに詳記せず
斬る迫て峡勢開朗田畴平曠天物を得たり回顧すれば
彩山は雲霧の中に隠れて山容糢糊殊風飄として来り嵐気
四に迷ひ日光蔽蝕し正に雨降らんとする者の如し時に雷鳴
風雨乃ち急行し守実を遠し二谷を抜して寧ろ雨は幸に降り
ぬ守実は耶馬渓の西端にあり昔日こゝに布鞋青鞋身を
百峰巒十三村落を跋渉せんと心大に勇む

耶馬渓

昔大山脈豊州を経て九州の二豊の地に蟠居し南山を接き
黒嶽を起し久住鶴見岳雌子の諸嶽命嶽を列ぶべ
峰峭石岩崖峰峯を載り山宗嶽天に擬し千重万重の乱
山耀峰青を紫に紫を緑ひて簇立中に一峰巍然抜
し衆山を睥睨して奇峭嶢絶なる者を彩山と呼ぶ彩山の麓
谿澗瀑の裏に所山国の一水を出し斬る谷して奔流滔滔巒
を浸蝕し雷爆せる岩層を刻し陣駭なる土壌を流す奇
絶怪絶なる大山岳は実に其真面目を呈露し来り遊に
海内無雙絶景の勝景を探せり是之を耶馬渓と

寸頃有一客此に遊びて邯鄲溪山天下無と絶賞し星霜経て此に来り壺天虎相和し
人遺知己死生未遇匠工為異材、怪岡溪山世所色、
曾経歴品題来、
来と今賦せしより苟簡ならざる所鐘を離れ亦其陰を聽
きりに流る人事年少滄海雪泥東奔西走遍く
宇内名勝を探り三跡既に天下に半すと雖し初め昇仙峡
びに妙義山を探り今又此を経歴し渓翁の所謂一百里隨
洞轉十三村總皆岡の間に奇を探り幽を窮めて天下の壮観
を盡すを得たり川等の十年ぞ、

十五日晴爽守實を望む四顧皆暗しと雖も大霧濛々として行こ
と少許天色漸く明け曉鴉啞々として林下に鳴ぶ一天珍瑞瑠璃
盤を磨きたるがごとく東天一抹紅を浚し空際に亭々として斬く
突く遠に蒼碧岳と渾融し光彩陸離金星尚光を
とし殘星紫煌其間に輝き爽涼衣を透る露氣日光散
し開闢し數峯早く起ち眼睫の間に行り正に是れ所謂
赤城書生寒元白、羅仙抗手儀相迎」なるの懐抱為
に寒しと
行くこと少許にして河道に行り所にして陽を穿ちて明を呈す誠に
陽谷を見ん沖壑に入る自然水流雷根に激し宗風鼠環を為す

左右に大山連なりて行く歳の月日を経し巨樹鬱蒼として嶮山数峰目を驚かす

すがすがし間を出づれば忽ち見る長堤曳いて林間を貫き遥光

遠く仰ぐべし九陽赫然たる方に山端に上

事なり此谷間の絶景全環無すると大抵

名をつみ谷を移す

谷中到る処茶屋軒を連ね飛泉雷鳴りて寒雪を灑ぐ或は停蓄湛然緑色を

一大宮国の山村居手ぶり林坡ふるる奔流巡岡崖を達ス

渓魚岸に其中に游泳首を擡げれば孤峰怪嶠嶮峻樓閣

小さきものは戟の如し柱の如く霊芝の如く破瓜の如く大きなるものは高

樓の如く屋の如く雲烟の蒸すが如く波濤の逆に立つが如く躍立

まるくの者西方の者或は倒れ或は倒れ間をなす者間をなす者

石樹を生ずるが如く樹は石罅より生じ根株を抜て石を攫み土壌剥

鐲或は全骨を露はし或は半身を没し都蘭の草竹糾紛

を繞り緑苔点点鮮し枝柳を被ふ樹色黄昏

墨彩影皆倒に水に落ち巖影と相混じ或は砕け或は立

景面を変ず時に陸に隠れ時に陸に隠れ

枝に枝に蹴り枝に枝に蹴り

千巖烟中に起つ遠陣調子手として

調子として鼓動し詩聲中に出づ水聲と相和し絲紅

緑の影乎に揺く宛ら幅倪黄の画面陸に展べ陸に

如く左傾右欹殿宮寺行く道の遠きを知らず猶生前程

を想像し且つ喜し且つ行く

林坂は実に耶馬渓中屈指の勝地にして耿介此に徘徊
す一詩を賦せんとし改を低れ回を巡り吟味して遂に成らず其
言ひ知るべからざるを怪り筆を地上に擲て去り去て今に擲筆場
と呼ぶ去路行て耿介が住ひて野猫を飼ひ狐狸を馴
せし所なりと云ふ此辺は不陸敷にして高し泉に臨み仰
げば更に高峰にして甚峻しく沈せしの風景依然たり
坂路曲折山漸く峻にして水愈奇にして轉じて渡る数回林
樹を生て青村を望む左岸の樹間冠石山を望む山容雷然
左折田隈の間を過ること十数町羅漢寺に
達す暫時住り

羅漢寺は世俗の嘖々賞讃して播名し心に耿介の所謂
絶山剥水真の壮観を得たり古寺巍峨に倚り山腹を穿ちて
洞窟楼梁を造り古羅漢を安置す像容の奇州鉢山の眺
ふるに境内の幽邃豊の佳なるに如かず絵りに人工を用
ひ置き殿を穿鑿して混沌地に発せり傍に羅漢の峰
大精巌実に天を刺し半腹以下は巨樹の中に行く此
方却て天然百景を呈して較歓ぶべし
又青村に帰りて東行す程なく植田の岡門に行く山勢最も嶮
絶峻峰直立して雲漢を凌ぎ真に実筒の春煙に出たるが如く
樹髪巌骨玲瓏相錯り危峰の上異色を戴き変

業動かむとす真っ昼なれど神鏡鬼刮たるが如く岩腹処々に聳
穿ち咽を吸う前者と同じく対して碧々渓流を瞰下し河中
にいたって武は意一意すれば僧侶も激越(遠鐘を聞くが如く)
詩書きず同書きて厳勢牙然大地を圧して人を striking
すがごとく徐歩して甚奇を出で長廊の上を行く奇又怪、行きて仲
坂の同門をすぐ江上寺石波に臥し地橋を架す前面には黄
芽軍繁茂財然黄色山腹の巌穴一小草庵を認むれ
仙法華を拉し空を鄙しき処、行き先に隧道西三行
(なる者の創設しものにして今日行旅皆其場
合みより四キロ以前に
庄屋草口さ部り往年神海道
呑場ありしも未だ山を穿ち抜くを事を受く、

を見て此近郷を動化東城井村を経ば岩峰千仞空を穿ち路石峯健
して及ぶをやそなて東
の穴道百三十間餘高
五横幅九尺矢を明
前の穴を行道
行なる所をせし道や
(古松野宗雅)
詩を吟ず
欄干を
風泉瀑然耳底を洗し人家数棟山を負ひ流に臨む
樹低迷烟大蕭條雅趣愛すし知らず是誰が宅か
光を穿微を匿み風光を点出するの途上に一堤竹之を疏
(面欲す風色絶奇馬溪の極趣恐らくは此処に存ずるか
ベし頃を挙て一望すれば樹梢の峰巒髣髴を天半に挿みて
峰巒時を転ずれば高山東方に横はり截然別成紫霞

ゆえに溪峡意巖容奥之一原の研麗を窮む

斷乎として峡勢同朗いはやゝ廣高岸の山麓を左右に走り

前程一望平夷馬溪の勝境を回解れば千岩萬岳煙霞

模糊平地より山より三四里にして中津の町に至り投宿す

皆守佐之助の赴くむきなしとか一日を増加し前程に支障を生じ若

し行はば甚だ〳〵と刻付の温泉にも至らざるべからざるやうなり

行〳〵船頭前常を翻し此地に来り明日これは船を乗して

馬関に帰らんを以て宿屋に着するも豆腐汁も持参せず

直ち湯に行かしむ知らず昼此地の風呂か湯屋は石外清潔

にして石畳みたり

いまやこれ筆をかゝして馬溪の佳境を試みむ歟唯東

国の士は妙義を推し西方の人は此地を挙げ相持して下らざる

以て天下の絶勝なり然れども此地を以て妙義に勝るとせんか

は生として山石得水石生動をこゝに見るべし而して嘗て比較の論據

に職として量る重きを置く様なり余は妙義を見ず今此を採

り比較計論の上に於ては毫も相違なし相違なしと雖ども

人ごとに如ず妙義の山は峻秀奇峭は寔に此地に過ぎ金洞山

地蔵ヶ岳の如き山石峰巒四顧し石筍無数其地那上水なくして

天然の空拙一向ぶする所なし果して水を副へんには此地の如

き技を弱くする山間い位の者にては三四日なるべし少くとも三里

天龍信南を法して甚同に終面せ一のむとを要す而して
此の岩石は皆の紋様中にして僅に一切を以て景を寫す其差は実
に此に在り然れども水を以て妙儀を寫すが如き実と謂
ふべき者未だ以て風色の美を盡すに足らず金は粉
して妙儀を以て此地を陳れりとなす或は紋様の宏大なるを以て尊
ぶ此地を尊ぶれども是又怪僻の愚論なるを免れず大なる者必
ずしも美ならず小なる者必ずしも美ならず殺人の利器にして甲乙する能はざ
るが如し好し此地を以て大なるを以て妙儀と雄しまむ必ずしもわが沢
いふにかの千丈石門に至りては実に鬼斧神工の妙を極め
うる者にして此地の佳人工を旋し河門を穿ち羅漢寺を造

羅青青琴得意筆十二句先罵倒

再罵

青琴、天下の三絶を軒輊するに耶馬溪を以て最も下れりとなす、而もこの文は烟霞小景四巻中の尤なるもの、一気呵成して天籟到る所如く、紙に筆に万顆の珠を点ずす、山を叙するは鏗鏘として金鈴を振るが如く、水を描くは韡韡として鐵馬を駛するが如し、何ぞ一の優なるものに筆を苦みて、この劣れるものに文に忠なるや。余の怪しむ所。（烏水）

羅青至是陽無顔色

して風趣を添ずるの愚を比せば雷壊の別にして比較なし
をれども此の紋様が妙儀に拙しはは山の底のみ事とす屋
河山の絶勝を探ぶ早去る早合致し数年此に来りて大
法螺吹き立て「今馬溪百里、妙儀者石知峯峰、謂之
海第一、武不誣也」といふに至りては甚だ臆太く推しの強きに
強かるべからざるべし、老顛可等の狂漢なり、
金は寇いかの昇仙峡を想起せしめ深川峡中一水屈曲し
峰巒の嚴絶にして天を摩する者知るべし可等の好風趣但し其
岩石は花崗岩なるを以て奇彩妍麗なる跌宕壮麗は却て
少くとも何一正に異れ妙儀と耶馬の中間を位して可なるべし

明星 日青琴三橋
得真高 北金華誌
華岩及絶景 平
第一 赤山間西大
妙義 昇仙 耶馬
第二 赤山間西小
神楽女潭 断魚渓
五番
第三 沿海西大
利慮 海存 北浦
第四 沿海西小
遠賀 桃島 大崩

然れども此地国より天下に絶勝なるべきは論ずるに其不一を言ふ
が故に名所旧跡を捜さざるべからず今は此上一新案を下し宇内名
石の絶景を挙げて妙義を冠とし昇仙峡を次とし其次に列し馬渡
島を第三とし更に一法を設て景を評論することゝせり曰く妙義山
は奇峭神異仙境の如く昇仙峡は妍麗婉約美合して耶馬
渓は怪偉石屋勇士の如く神将の如しと
序に記すべきは凡て物其終の刹那に於て極と昇仙峡は山水婦人の美を以て画く此佳境のつゞきして行
路尽きんとする所に現に余の如き唯前程荷と想像し
金渓千数里宦途往返して其奇絶の個処を知ること能はず

七、壇の浦

明治廿四年朝時鼎の時七月廿日の夕方より船に乗り海上に出ること一里汽
船佐伯丸と云に乗り込み此辺の海は遠浅なれども舟を泊する便なし
ば岸には蘆荻茫々たる日鷗浮泛す波無しして水清ければ水
中の游魚を数へ得べし回想すれば中津の市街楼閣秀美にして微波
揺動する一奇観なり九時に汽船は碇を抜きて航行す二日夕
方に早鞆島と云所に一回泊るのみ午後七時雑賀屋に宿
は中板敷にして風通しよろしく海に臨む舵楼に倚て望めば彦山峯
天末に聳て煙霞模糊たり高峰美人髪の如
ば頓想尋常猶風景を顧眄しいやゝに一対次又早鞆の浦

[illegible]ら潮流急なること川の如く左岸は絶壁数座相連り其
勢殆ど処女の霊神特華表の如し 現海湾布帆来往し帆檣林
立す 程なく門司に着し又艀船に乗し馬関に渡る毎客に
上陸せしめ吏人来りて臨検し御貫姓名を訊ねたり厳なり
蓋し日清事件と虎疫流行とに因て然る者なるべし
馬関の湾は狭く能く巨船大艦を容れ漁笛の聲常に
絶へず市街は人家櫛比して行実縦横にして街衢整隠にして
輪奐の美なり故に海潮を沿ひ長き一里餘の商機盛陸にして
富豪豪商多く実に山陽の小浪華なるの名を負へり
[illegible]歩すること暫時にして[illegible]

陰数十級を上れば祠堂あり鎮西第一勝と記す金字の大
額を掲ぐ祠は現海に面し眼界忽ち開き水光山色恍惚
たり對岸鎮西山峰巒特に奮へり実に稀見の好風致
なり 路を回して赤間宮に詣ず
宮は市の東阿彌陀寺所在の官幣中社にして安徳天皇を祭
る 此地は阿彌陀寺の自歓元年行教の草創する所なり
て西国巡礼の伽藍なり 又次の後安徳天皇の此地の南しむる
去の其御遺骸を海底十餘丈に葬り奉る 是
年長門国の教し寺内の御陸地に御影堂を建立を教歌
[illegible]し永く天皇の冥福を祈り寺

を廢し御影堂を天皇社と改め社殿を宮の赤間宮と改称し
土殿を新築す拜殿神殿樂屋祭庫懸屋餘所宮備
り、萬づかぶとなりしこの宮し、神門三つ有り左右に遶垣有り神殿
続きに壇ノ浦にます御陵は社の西の方にあり只孤松一株を植へ
たしき梅すこ圍む其上に宮あり左右に石鳥居三個
と墓碑十基あり墓碑に平敦經、清經、知盛などの平
家一族の名を記す地は紅石山の麓にして甚だ高く眺望殊に
よく前は直ちに海の海を瞰み斜に文字の関と相對し其上には
筆架峰嶽然として峙へ左に壇浦の古戦場あり右に彼
津の裏の遺蹟あり其の新羅崎百濟野巖柳島の跡
は皆一時の中に集り遥かに風景の絶妙を眺し風
致奢と氣象あり山なりも東に行くこと數町馬関の所と出ば
北に壇浦に出る
古の壇浦は今の馬関市東端壇浦所一帯海濱にして平氏
滅亡の地なりと有名なり雪樵夫なるの馬関土産著
し中に此地の詳記あり曰く壇浦と云は長府二の宮の沖潮
の干際に當て第三の筆表あり早鞆神社の石段百級海
中まで達す毎年十二月晦日の夜に海布刈の神事を行為
なと云ふ此辺周りて五百段の浦なり又曰く壇浦と云ふ元
は前は此辺一帯海なりしが後に陸地となり家
根屋敷なり一帯新を開しが故に数

防衛の為に砲台を建設するに至り文久三年皆一新し今
壇浦に猶その地は数多に大小を及び西に御裏山を
控へ前は字和の海峡を隔て近く豊前の国神崎と相対し海
峡の幅は僅に壱千間から長さ三千間に過ぎず沿岸は岩
来り海中一三所に突出し故に船舶の通行する処は三四町の間
すきぞ云海の波濤寄せ来りて流駛すること故に潮流の疾
きこと奔馬の馳するが如く実に潮と吹守は一時に千里の勢を以
て航すべく逆流して進むには大艦巨船も佳に力を労する為に
して実に実に行ぶべき実に宇内有数要害地なり海面を見渡
すに二筋の黒流戦既に自ら接し展の様屏となり上と意

を決して生死の際苟に悲慨の情に耐へずして想
像せるに今年眼前に見るが如く感慨寄られし安徳帝
の葬られしは御裏山の流末なるが此山に洗
濯するに所なるは伝ちず潮汐の干は城下に流れ出でて
は平氏滅亡の時婦女婦行べき処なりしも
なみのうねりはいや又赤間の宮に於て毎歳三月二十三日より廿五日
まで祭礼を執行し稲荷町の御城を粧ひ盛に賑
すを世に云ふ山陽道の赤間宮校中を見へ
折しも吾れかなたに汀上蘆雪筆し絵倉庫にて
海上艀回櫓漕ぎ楫棹有り無遠空に帆の白きを認む

上大蟹に他ひ去りて所謂平家蟹とは是なり俗伝傳
へる所二十氏京びて其霊化して解脱をなり其甲に皺ありて人面に似
て情怨の相を帯ぶと
豊浦十月二驛を経て一時山岡を越し程なく海濱を出て長陵
水に接して巡起し岐崎直ちに水際迫り白波怒弾して
筆舌の事には干珠満珠の霊有り蜃楼
縹緲の間に立り夕陽紫を放ち雲皆奇彩を為し絵霞
を映す幻又奇此杜埴生驛を右顧れば十八日朝発し松
浦の風景なほ海の見やるを自由と眺めつゝ行くに国境きす
ぎ周防の万年次十郷の驛に着く

八、山口

山口まで二里半と聞きし故まわり道なれど徳を越す友人澤田牛
麿を訪ふ相実のことを大に驚喜せしこと申こにたりしけれ出男
金が竹馬の友にして初め播磨の中学校にて相識り一南海文を修し彼
の東京に移住せし折人を共に九重坂上の下宿屋に住ること数
月文者を同じし相勉まし相導き幸に学問共に第一高等
学校の試験場に臨み彼は首尾能くして全く及第し大阪へ出
金の方首なる驛尾に付き能はず幾許の故にて仕度へ回送
せらるゝに至りぬ同伴に同居し相州の人黒林、府川の両名は高
等商業学校の試験を受じ府川は及第して主計学校に入

書生情誼感泣すべき事

黒柳は病の快癒して中途を歩み七月の末つ方四畳の間に引籠て机を倚り二十数冊の同類を研究せ〜折のこと志ならず怪事は酒なでの外しことなく牛肉屋へ行きしことなかりしが

余が仙臺行を送りむとて四人相寄て数杯を投じ四銭は書を書て辯じ出る神田の某社上り一鍋の肉、数盃酒、暢飲快食し五十前後の遠志を述べ宿志の壮なるを論じ無欲淡泊年有月明を階み清風永前に臨歩せしことなど又夜に思ひ出でる今時の中学生徒など輕薄にて酒食を耽ける奴等と言しそぞ余等の事侍り聞せて涙の下針まで訓戒しやり及し彼中に行ること一年其家出る移りし事転変せり彼の黒柳生涯を酒を家に行其生徒知れ出れ出れせし無心清思は唯余輩四人食手を握りて歡迎するを喜しは実に快中の快と謂へし嗚呼何日か四人相會し四九段坂頭下宿屋に憩屋し日日の夢を成するを望む

十四朝の中途に見物の事内安に高に大連北に立ちて出づ
まつ豊崎の神社に詣り別板官都社に毛利元就を祭りしを社に獲城に詣る
折ふ社を此地の遠望せしとて河殿や宮壮境内清潔出遠なり右は連山の峰こそ望む其一峰はきき右氏の

城の名しるしとて今は荒れ果て草木のみ繁りあり
野某 鎌倉を以て氣象觀測所を設く 此山の奥の谷々に
茶の湯に用ゆる水を汲みて井戸あるよし 高麗の城址は鳳凰
の足脚として浜きこゆ 古木森然 堺のいとし山々丈五輪塔屑の中空
清水の出るを見る 瑞龍寺 寺は有名の寺院なりしと人言
創始伊大唐津の感 懸り絶えんとする一筋の路に至る 萩
への街道 ひたすら西山麓を辿る 必ず深き一旨 怪巖峻
青松竹其間を點綴す 水は清冽にして碧玉を流すがごとく
谷々に泉を思ふ 孤影寂寥 雄し景を撫すと雖も
吹峰

外郎といふは
相州小田原に
本家あり、未だ
此地に在る者聞
かず、今之を讀
みて始めて知る

此日は小說雜書に目を曝して暮らし 三時頃より殷雷
南山の陽より起り 雨雲吹いて至る 少時にして驟雨灑
ぐ 今年大旱雨を見ること少し 実に快適なる日暮方
散歩し市街のさまを見るや 繁華にして人家櫛比すれども田畑
の疎なるが如し 未だ嘗て 描可なく 性と長きのみにして 弦ん
黒に餅るといふ所の東端に菓子屋あり 「うばらし」といふ羊羹
牛皮を折衷したるなり 菓子 實は外郎なり 大内氏に
ほ事る唐人員外郎何がしの製造を傳授したる者をいふ此
所には二階建 実を美なり 昌寿中 陸の生産なり日々来る
宛山住屋の二番屋といはん

こゝに事こと道を尚り行く岸に鎖石をいと大なる巖三三行く昔
大内氏の頃には千石船の舳艫相衝て幸り碇泊せし所なり
とぞ今は中舟のみ浮べ難き程なり流るゝ桑千年の変又変ぜし
十九日高等中学を見る亀山のことぞ少丘の麓に行く前には青
田海をとして其間に俗之道路を刻す陣乗場と相並で行く
体操の道具金棒、鉄木馬など皆門前の空地に行く学校は事
務所教場として廻廊をなし此彩を施し一見寺歟如しやの
教場は皆木造なり図書館の如き廣大にして倉庫附属す
四隅の奇書其中に充溢すといふ徒て我が邦二百年学校及ぶ
所にあらざる進歩の如き遺憾なり

澤田は潮上野などゝ三三人の友人を伴ひ余と倶に湯田温泉に
赴き其日の用を済す湯は塩類泉にして淡黄色を帯び味無
臭にして酸味のみ強し陸路五月は宜しく夏の頃にあれば
大内義興の所、願成寺の中央に聳て口碑を存す
此寺も亦元亡を旨とす悲しみ撫して涙の微温なるを知り
或は浴繁まること数日忽ち温湯の酒出ずるを得もの如き甚霊
験なる知り遂に温泉浴場を図ることとなりとぞ凡て温泉の
発見の事実必ず皆かくしもなりたして傳説に陳腐に属す
地は四面水田を囲み別に見るべきの景色もなく旦つ浴場の帝
とて俗塵外にかゝるに見事なる高楼を設て浴客を接待し雅客し

炎熱開を極め国土書燒すること如何ぞ数回探決
持参事ども談話など法外見個堅し雑法し業果腹
ふくらしし口碁となればかの事ぬる
二十日朝稟して発す。澤田氏の祖母君など特に別を惜み給
ひて今年老を余旦夕を迎ふ子孫や御身の成立を待
すの日まで長命なり得ましなどのもひて涙にくれ
し人の常を情深く有難き言の葉の我骨髄に徹すも
き心地せられぬ。澤田氏迄り来り、やの外郎迄まで来り備一
二里し行かむとまた意を戒めなる迄君千里雪別と思ふ
語ひるるものをとひたまぬ帰りむ豆の枝を腸に行ぬ
ぬ。

九、錦帯橋

暫前の風雨の収まりしこの日は強に暑し。頭痛劇しくし
ばしば計に夏の日まらんとこの つき基きに絶身疲憊し三
き指どころ午の歩むより延し二里ばかりにして結峠
みかく岩頭上に陸道を穿て長き九十九年の
同撃まかり其巨歩ふまりの行、同中道泥濘にして附
時三度泥まるけとなし。同を出て孤法に憩ひ筆結水のし折
同懸まげなる花崎のぬげに慣れ人こそ是非なれ出に海
結ぶに陣る程腹立しくの午れ此老婆の沢に老年骨一つ笑
十度者と思ひ出る。試は同中を通過す折柄の方より馬車

来る[ヶ]浦(ヶ浦は)洞海(洞海は)黒にして水くさく故遠くも見はし恵び来
河の通り枝出まし坂なり但し此月の又は成就しらず
宮市、年貢、富海などすぎて四時頃徳山に着く扶桑此
処は毛利侯支藩にして今もて街巷も商業
や、繁華、諸官衙あり地は広く中央を貫ひ前面は徳山湾に
臨み仙島黒神山其西南に横たり海陸の運送頗る便利
共栄社などと云ふ汽船十隻を有すと今日過ぎ来る路
人の語り寧にして道同ふしいと軍四の敵へ呉れから知事是
嶺風冥々の樹多し帳中に坐り月を見る毋として其事なし
此夜蝶々飛び繰り

三十日朝発花岡今市を過ぎ午後玖珂に着き路に茶店
あり何やら分らぬと云て呉ぶに知らに拒して肯かず止まりに又
呉ぶに遂に強て求る赤飯四人分にて持来る何の故にや要
人宜敷し午飯食ひし外り毒隠と云ふ腦ゆれば食
ばに茶飲茶を掬り鍾鍾二三杯にて喜ぶ是我の外
なし宜徒人皆然りと見れば傍に中村氏知ず何の
神事なるや今に至て解する能はず玖珂より岩国まで三里高
二級あり共に峻峻なり前者は中級と云ひ往時は古木森と
し唐寧寂寞実白昼行ず追剥人殺しなどよく行はし処と云
必道律れとなし一老人物語れり時に天や暑り嵐気怪

として棟梁飢餓飛騨すること旅思自ら悲しむに堪へざるに岩国
の人士に臥龍橋と称する錦帯橋と相対ぶ高時錦川の
水を抱き沈石散乱し山形をなして夕陽沈むを望み景象怪
奇又書図に勝れり橋畔に小家あり橋銭をとる問へば二重な
りと宜金乃公曰く小銭更を無し京を出て橋賃分曰く
少しもなきことよもつまじ舎人全無し先は些かしと裏を倒に
して三回之を振るに乎彼曰く詮方なしまけて置けと乃渡
岩国は元と吉川氏の城市にして横山村(ここに城墟あり)と相対し枕
流宋人家稠密にして最も繁華と称せらる市中を漫歩し名
を求むるに渉絶せられしこと両三回遂に錦帯橋畔の一店に投

旅客橋を渡るには常に此金銭を惜しみ用すること可。

宿せむとするに未だ夜に入らず杜散歩し錦帯
橋畔を往復すること両三回亦邦架橋中最も奇巧と堅牢
錦帯橋は一に鼻盤橋と云ふ本建築法の如き模範橋なり橋は
とき以て名称するにはして実に日本建築法の如き模範橋なり橋は
岩国を横山に渡り延長一百三十五間最も高き処水面より十二間
先づ河中に石を畳み巣きをなして四個の橋脚を造り其間に半
円形の五橋を架す橋は一柱を用ひず柱を組み合し相憑り
以て全橋の重量を支ふ其構造自ら洋式に適合するの
みし延宝元年の秋藩主吉川監信命して此橋を作りしの
両吏佐藤七郎兵衛なること幾十回なるを知らず雖も一回も同時に

錦帯橋今幸渡

全橋を架せ橋ることなく或は一橋或は二橋を修築し度もし舊
形を變ぜず而して此橋の堅牢なるは職として四國の土臺たる
に基す皆下大にして上やゝ小之を以て一たびし崩壞しても
今は橋畔に錦帶橋の碑あり審らかに其緣由を記す余
は思ふ此橋の奇巧なる延宝年間七月なるも猶ほ猿橋
と東西相對し以て日本建築の雄を宛かに爭ふべし
宮嶋に詣で舟を河内に寄せ陸路を行くこと凡そ
ば都合四里にして大野まで行けば宮島の對岸にして一葦以て航す
き由なき無それと決め都宮とは西三天集ひて所伝読を
す本典を破ることなかるべし又無しとせざるべし

十、嚴島

二十日 新潟を出で畫午歩し大野の村に出る此間の路は時に海
濱に近ぐ時に遠ざかる晴れ一舟を雇ひて嚴島に渡る折しも乘合の
客なければ我れ一人にて態と雇ひたるなり屋根舟にて船中しきなか
らず中に西洋人の物なり船室を開き左右眺望すること老軟佳
麗遠近西洲渚巒環潮碧山緑相映し清風陣々と来る
舟漸く島に近ぐは華表海中に聳り廻廊水に浸ひたる畫
の如きこと毫も異なることなしやがて島に着き舟を出でて後
る旅客と杖し勢し杖して牧社に行く
此に華表あり「華表柱深休鶴翼、廻廊影雜現龍姿」

又「貝鬮珠宮閑日月」重書鴻實鎮山しなどの聯句を彫る
海濱を三笠濱に直に巖島求初山なる、阿佐求殿拝
殿幣殿拝殿より成り拝殿の前に高舞臺あり三間許
左右に青銅獅子石燈籠を置く之を挾て左右に手舞臺あり
清水の上に引き潮満ちれば海水床下を浸す其端に楽屋あ
り、舞臺の書を見に大燈前あり海に引き出すこと七間許絵に
ゆの字鳥居と相對し其端に一大燈籠を設く
拝殿の左右を廻廊あり屋曲百五十間。長に亭一間毎に鐵燈籠
を釣る社頭の明燈は古詠多くせも聞しものなり
廻廊より見て数ある燈大小宮居しるし岩島　宣阿

廻廊の欄間に名家の揮毫を掲ぐ額を掲ぐ、錦、実隆書、光
信書の忘恵、素絢の秀郷、雅峯の鶴、兆殿司の蝦蟇仙人、
尚信の羅生門、常信の三福神、探幽の猿、鯉、祖心の猿、藍江
の鍾馗、抱一の水、筆力雄健最も目を奪ふ仔細に歓覧
せんには四三日を費すべく宛然一大展覧會の歓あり、本邦の神
祠古昔より此風あり名家の筆跡を千年後に宝島に坡
匿せるは最良方法なり但し年々の注意最も肝要なり
多数の中には古くなり彩色剝脱し模糊となるものあり惜しく
斯る御社に奉祭す宮神社として五社あり主素盞嗚尊の
五男神なりと云ふ太宮に坐ます天照大神と素戔嗚尊とを中

に振り奉り左の方には誓財天の三女神と国常立尊を神とし奉り
国泰天満天神を尊び神とし奉り亜墨利加国より
殺り其傍らに半月形を其世せる入江を鏡の池と云ひ退潮の時
は其くぼみに水を湛へて大海を模し月影の此に映する実は美観
なり由かの更科田毎月の面影と以て通ふべきなるべし世人名付て
海中天華表は社前の大焼前を距ること八間海中五間
上に建ち満潮の時は冊参詣人を載せ順風に帆を張りて此
を渡りて参詣すべし本社は七年創建の時より此地に移し遷宮
遷宮有りしは明治七年十二月に本所始の式を挙げ翌八
年遷座せしなり社殿は燈籠の御事として普の表野氏
寄宮海の事なりしと傳へられ今は存せず大内氏麦清せし後
良天皇宸筆の額今神庫に蔵す宗社のきまは一体に早や古し
しかるに此の美観を見ん人々
回廊を西に沿ひ事業は松原より左に御手洗川左は玉の御池に
ひ海斗七まで長州にして松回百八の石燈籠より御手洗川を渡
れば大願寺より豊玉海濱に沿て大元浦に至る数株の桜
樹を栽へ初より浦の後山は是宝寶岡にして上に二層の塔あり昔
し陶氏の陣を構へしことなりと云ふ滝川を渡れば大聖院の地にて
御手洗川の分遣橋を渡れば本殿西回廊の後なる花園の桜

樹成生ず処なり後白河法皇臨幸の時行宮を設けて松栄御所と称し処なりとぞ御幸松なるもの又此縁由ありて名付し物なる
傍らに寶庫あり本社の背後に三塁原あり南に大なる紅葉
間に点々に楓樹櫻樹と交り泉流琴瑟を弾じ奇岩石
磬を敲く花樹怪奇巧を呈排置せられ其風致を捕ひ難
度人い動れて樹下に跪ずる等眞に深山幽谷の想あり
景地絶妙遠国雅なり
此辺還ること数所東北十進せば大宮の国に至るここに有名なる
曩教寺大国朝鮮を伐ちし九州を指さの途次本社に寄
こ歌を詠じ天正十年凱旋の際建築せしものにして今国宝に
豊国神社を安置す七合は甚南に行き方三間半九輪表の墓
此て本丸にして慈恵十年倒壊せしを今年再修せしとぶかて此
院と大方なり初めかつて宮島の社を建立せしとぶかて此
ぶ御山宿を経へ浦山の辺を宮の又島廻りとゆて高舟に帆
を揚て島を周りて七浦の神社に巡拝する所金が今回行脚
期必過し時日期なるべて遠慮なく思ひ出り他日鴻仏の縁
再び到らば誓て立寄らんとすべきなり老ひ世俗を仙宮宮嶋の
景軍にかの社頭海中の華表なり廻廊の水上に浮ぶを見る
此を見て此処に金殿を宮殿なる者と假想し恥かし風景の評
論を試みる

此島周七里餘七浦
十景比須ノ称し海山
と弥すべ富士峰行
りて海内の名景とい
ひしかしなり世ぬ
社堂回廊聚まる
島はて風景また
さしてなく島山や平
和国の勢すべ如美き

扨て言島は古より扶桑有数の好風ととなへ松島天橋と並び称して江島竹生島と共に三辯天
の両宮あり殊に江島は更に高き山なし余はまだ天橋を見ず又竹生島に渡
らず故に是を比べ難し
おもんぐ宮は拝島江島と比較して優劣を別ちがたし概して言へば
山地風景の主眼は
島に及ぶべ
金は拝島に渡ひし日島嶼排置天工細緻にして
殊に海中を遶るの折古
三日月の如しの形なべし千の島遶回して書きすべ
三辯法好を回り一感景り日
此地に来りて見て無比生涯
の寂し思ふ所大に
七浦の奇陸
は或は貴ぶべき者なるべ
松島天橋と並び称
江島竹生島と共に
辯財天の両宮
余は未だ天橋を見ず又竹生島に渡
らず故に是を比べ難し
概して言へば
狭
彩霞の美なる
彩霞の美なる
彩霞の美なる

口吻を寵るに足る

巧に人工的の細美を點綴して燒却せざる所なし
て數丘を畫き退らず所々に
て此地に來る海中の華表に鹿を比する相違なるべし畫なるべし
見るに比せば實境のさまを
旅宿にかへり一浴し欄に倚りて涼を納る心氣快適言はむ方なし
但し數日前風邪の兆ありて幸に劇しきに至らず略全癒せしも
四肢倦怠し飲食通ぜず大上座敷には用ゆるきれど飯
も食はれず肴に行かず酒飲まず唯だ金椀
銀盤美酒佳肴甚味を賞する能はず遺憾極りなし去
年宮年微恙に罹り事なき思ひ出でて旅の心地と云へり

十一、三備

二十三日朝二時僕を蹴て起す嚴島港碇泊の時殘月天に在り
霧氣蒼茫として海光黯淡たり四邊の岬角灣澁煙霧に籠
りて都て有無を分ち難し待つこと久しかりて漸に開いて舟を乘る錦山
丸と云ふ折角半等切符を購ひ乘る船室充滿し一隅に僅息を
は實に如何なる所にて宇品に上陸し某旅店に休憩
すしばらくして車を駕して廣島に入る一角の雉城樹間に
隱見す行市中を巡覽せんとせば風雨劇しきに到て打ち止み停車
場に入り汽車に乘り岡山に向ふ軌路は常に國道
に沿ひ車中にて歩行する同じく觀察し得べし

車行迂迴すること久しく感を生ずるに至る此地は三原を去る尾の道より凡三里余の海を隔て大賀屋石の二山其後に峙ち向島其前に横はる大賀山は天正年中杉原元經の居城なりしが今は山麓に千光寺あり山は土質赤褐色にして立ち青松蒼々たり白壁金碧其間に隠見し南は茫々水を隔て伊豫潜岐の翠巒を模糊の中に望む風光頗る明媚なり此を遠かに見て車行弐里半にして陸道を辿き又海邊を歩む山は概ね奇峭峻峨海は澄清碧島點綴せり三原福山など倩眺皆四隣に聳ち城樓儼然たる曰豊彩繽紛剥脱し好に類破せむとす笠岡寺島倉敷を過ぎ午後寺岡山に達し車を下るや直に南に眺望し三備の地景勝を此に盡す車を駐て暫し去る他日再游せんを當に閑幽顯微を究めんとす

羽高青琴今云三備ノ勝景余不能省省矣三備多尚同是其復者

登玉崗一五而眺瀬戸海其復者自尾道乎寺（今実見名）瞰下見者復者余不能省省青琴今云也

十二、後樂園

車岡山に達し人車を雇て後樂園に至る園は水戸金澤と並称し果して園と云地は烏城東北旭川の對岸に在り藩主左少將池田綱政の創設する所にして貞享三年丙寅土を起し三萬坪の地を劃して園地を定め爾後池畏世に其の庭園家を修補し更に其區域を擴め多く樹木を栽植す四面には堤を設け竹を植て屏障を成し門を畧に開きて直路を地勢は西南稍高しと雖も園中四方に池沼を穿ち堤を築き園中四方に池沼を穿ち堤を築き園外の諸峰を遠望し

園の風致を增す。在昔此園を設ける獨り游樂宴遊の爲のみに非ずして或は農民稼穡の艱難を洞察し或は文武の武位を講習せしむる爲に造りしものにして其初は御茶屋數を称し役住軍に後園を浮び明治四年今の名に改め十七年綱政の隱棲中清心園と號し四民游觀の所とす

園の廣袤數千坪亭榭の樓閣に花月の夕、紅雪晨風の時、光景見るべきものあり南は天生岡麓にして雲表に聳へ東には曙霞三峯の俯山直麓に列立し陸奥宮城或は塩竈或は瑞井山の浮圖其間に隱見す夜鶴亮に遠に天外より聞こゆ時鳥鳴いて朱欄の間棟朝暮時を窺ふ者は延壽亭及び奇正

洽斜流水環繞せり其間に臨海軒及び賜望亭金波湖上等の名ありて望湖園及び春樹綠苔青陰堂の數ヶ所あり花華園及び茅屋柴扉老松樓に在るものを茂松蒼々たる紫煙眼を奪ひ秋陽錦を曝す者は二色園の霜葉なり日沈青松頃欹ちて臨む者は中島釣臺也梅林は素花玉珠を綴り櫻樹は春雲艶を敷き菊園藤架又其間に雜る

曰く廉池曰く憩山曰く蘇鐵園曰く流杯曰く花文渠曰く利休堂曰く新亭曰く寒翠軒皆各其景を尽むる者にして他に射圃に演武場に神祠に佛堂に或は石橋を架し或は地橋を設け大路を往復横布置一一名状すべからず

或は伸して曰く山の美麗風光の明媚は世界に有り而して皆我
勝廣等人工勝を主とり天然を此地に於て見ざると然れども余は
天然を以て人工に代るを欲ず何に美なりと雖し崎嶇道に假山廣
切なるも嶋島城の上夕陽傾き輝鴉陣を廻る飛ぶ時也
園を出で城邊を繞りて市中に入る
岡山市は街衢縱横道じ交通繁盛殷賑山陽道中
廣島第一位に位する電信電燈線は交叉して延び大廈
高屋相極り余はこゝより舟に乘じ山陽嶋に航し寒霞渓の
勝を探索せしも時日なきを以て思ひ止まり市端の一茶店に
し酒飲み腹じらへ佐上に向ふ時に午後四時頃なり

十三、臥龍松

佐上まで凡そ七里半生の精力を奮て歩行せし其疲れは夜
九時頃に佐上に達する半里程前に臥龍松を見る夜なれば
心行て見る街道の北二十許一井某の宅地に於て一井氏世の祖先
明明德三年翁の庭中に植へ年を経ること茫に百年余年寛文年
中屋敷岡山藩主より培養の賞を受つる為め年に米若干を下
賜されしが維新後此を廢せり
其形状及ひ大きさは圖に詳かなれども稀世の巨松とす
樹しうるし幹と枝に人工を加へそしに巧みに松は差へ上
是れ克明氏百三歳の長寿を保ち一百歳の時に植せしものと言

ちと経契にて桜花十かてすでに満代の春

いつの代の春を契りに色そへて猶さかへ〜松の言の葉　九條左大臣

今年より春成て色深き君が御りの松のみどりは　有栖川宮右大臣

等閑風行

世を広常に桜は万人を施しうるに枝を曲げ幹を矯の

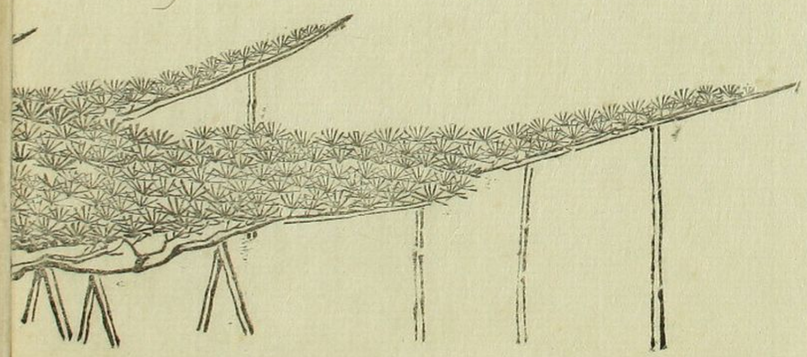
如く健の素質を失はしむる者にして此松も又甚だ近しかる者

愛で賞むることを知らず　松樹真正の性質を顯はし自然の優

美を深山絶壑に求めしむ　嵯峨離宮を数千仞巨松

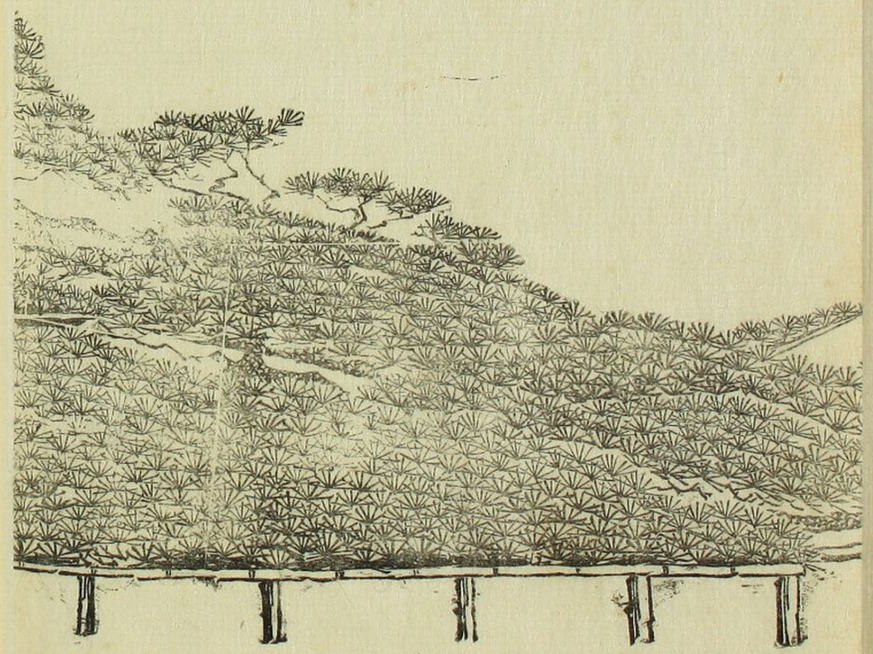
倒れ怒り蟠屈して猶凌雲の勢を有す　真に男児の気象なり今

此松の如き人を以て献忠の情を起さしむ



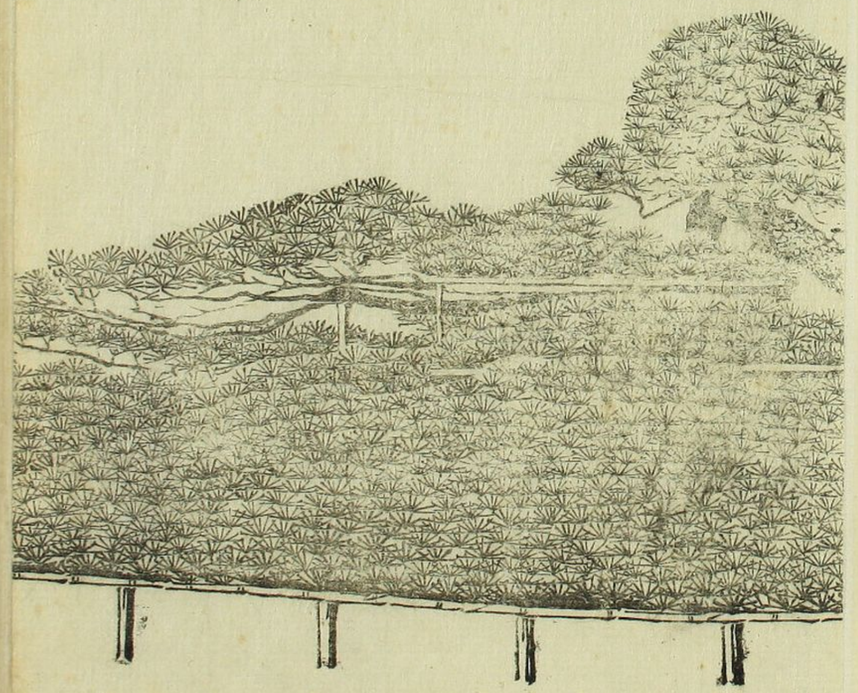
大内乃
さとにも
老ぬ
松の
おれも

臥龍



松眞寫

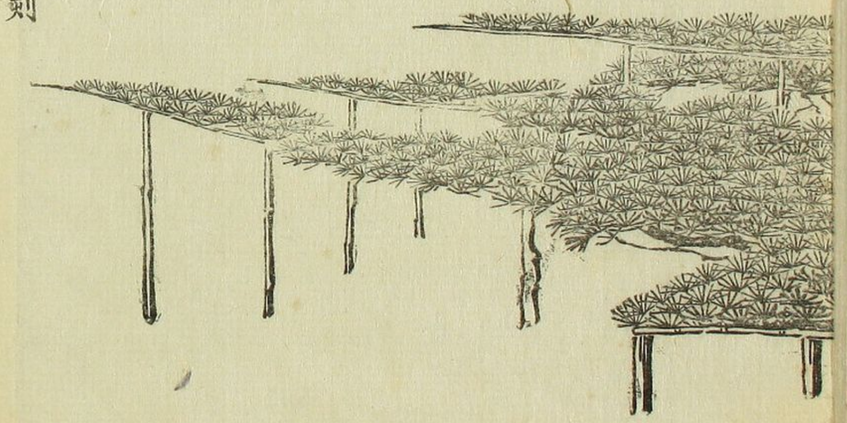
臥龍松在于備前和氣郡
大内村一ノ井氏庭中一一
幹九歧千枝爭重萬朶競
横實有虬龍蟠卧之狀一日



其祖松翁所植既經一百
餘年今改度之樹高凡二
丈根圍凡一丈枝条之長
左右凡二十丈前後凡十
五丈而偃蓋大小其大者
上可以展二十餘席云偃
榮至此可謂奇矣嗟亦由
其培養之得法哉
嘉永庚戌秋九月

香門篤識

明治二十年一月
弧月山下久馬太畫
吉田松翁五世之孫一ノ井盛太郎惟明改刻



十四、赤穂

夜九時半上驛中の旅店を拔す浴すること四度を用ひ旅店の食を勸むるに夜店を來し舟にて赤穂を航し明朝見物仮婚姻に赴くの快旦便なるを以て一杯氣嫌の折柴中の寂寞を忘れ若干れうかを飲り遂に決し年して舟を艤せしむ舟は他の客なく折は重と數箱を市商むべきに此杯得ること能はざるを遺憾とす金二分にて雇ひしことなれば安価と言ふべきなり かゝる旅店の好事極なる物數に特筆す（まか）すは客嘉なれども度見なるも慢ずかしく皆言ふまでにうけなきの（ひ）ら過分の散財をなし四三更舟の準備業回と荷とを携へて乘る

時潮正に満ち一灣の夜色蒼然として海影煙の如し漁火西三
泊河に漕し水鳥うきねの安かれにやあらむ河に羽ばたきし心地
し暫くして櫓聲伊勢乙女の鏡中水を撫し一舟棹さして常世
白ふ露氣蒼茫として冷なる舟に達なれば横臥し仰ぎ
び銀河の底を見つ心曠然として流星一點天球を横斜して
光芒長く延きて海を禁して去る酒を仰げ放歌高吟し又臥
して曉冷氣夢魂に徹する光景いとも輾轉すれども遂に
眠られず夜半四更一縷の殘月櫂りて鉤の如く小時水を映し大魚
立して躍る三千の島嶼髣髴模糊として皆く漁風颯として起
り清爽氣肺腑に満つ

朝四時を以て舟を発に乗ぶ醒を醒し酒を温めし又
傍一酔陶然として見れば東方漸く白からむとするに舟を棄て上陸
す途上見る所皆塩田にして塩竈焼く煙ゆ屋より昇り一村長
く延きて蘆葦の間に忽ち喬木の間より
ら又赤穂城址を望む天主閣城櫓已に毀れ僅に墨堤老
松を存するのみ徳を行きて忠義に殺れ後に学ぶ城内には大石屋敷其
他の遺址にて其屋敷跡には良雄の愛樹なりし一株の大櫻
大石櫻と称する所に目下大石神社を建設し其遺蹟を保存せ
する企ありて来賓者をして坐ろに元禄当時の事を追想せしむ
るとふ

赤穂より夜未に曙けて花岳寺を敲くまこと少なしと寺僧門を開き迎へ今寺は浦西にして雅致ありて内青松曉風に吟し鶴唳清心を塵ぬし寺は曹洞宗にして和尚和尚を風山と号し雲山と称し浅野侯代々の菩提所なり　観覧料として数錢を払ひ同帳を請へば寺僧は西部の義士堂に先ひ木像及び遺物を指點し雄辯滔々水の流るるがごとし　像は略ぼ東京泉岳寺と同しまゝ常に龕中に置き位牌は彼のごとく打敷を以て容潭なるを生ずるが如く覚へず頭を垂れて低からしむ

書き出でゝ之を對する門を入れば内に一碑石の建設にかゝる碑の背後に一株の稚櫻ありしを大石氏旌前に植ゑ者にして忠義櫻と称す他に一株の弱柳ありし者を移植し不忠柳と称す非情の樹木可ぞ忠不忠を関せむ憐れ其人今去て個の花を負せ之に里を隔ぬと雖ども春ごとに咲て邑を朝歌と名くれば墨子車を回すべし　慎しむべく戒しむべし　二樹相對して門扉を護ゝ立を義士塚に詣る正門とす門を入れば面に三基の石碑あり中央は浅野侯長矩左右は大石父子の墓なり　其外又泉岳寺を同じくせざるや密接して排置す　寺には義士戒名帳を備へ余し後日の記念として数葉を購ひ得て去る時は朝旭山門の霞を射萬家の炊煙露然として昇る正に午前二時過なり

是れより姫路まで一里有半、路は廣けれども間に歩三四町の
龍野まで二里半、こゝより陸は半島にして行こと三里半にして白鷺城
の実況として雲際に聳るを見る、夫姫路市田中氏迂妹
を訪ひ其家に宿す、此日二月三日なり、迂妹の宅先に相州伊勢
原より余が過国巡游の時一訪せし人相見ること実に三年情
況半宵に亦事まず、
二十五日終日清書に閑を消す、此日第三評園赴韓の兵士の
汽車にて此地を過ぐる者行列観る者晴れやかし、夜市中を散策
す可成賑かにして一日の費備はらざるなし、翌二十六日も亦終日
雨なし

十五、書寫

二十七日朝七時頃行啓請ひ受けて書寫山に向ふ、市の西郭に
差掛して行く人家西北の方に帯りて樹木鬱然として山峰の
枝を出づるを見る、其方は如何なるかと勇んでわらじ二三の村落を
経て寺前を流る行くこと数所にして山樹蔭書寫村に姫
路より此迄僅に一里、路より陸路にて嶮峻し土質赤色にして
黒松杉多く枝葉茂りて日光を遮ぎり然中一本杉と姫
路幹夫きを四圍はかり新然として清渓を衝く山
上巌石多く嵐翠雲を吞んで地を蔽れ秋の鮮緑を碧瑠
璃なりと謂ふべし二十九所にして国教寺に

寺は天台宗にして延暦三年桓武天皇の勅願所なり寺は天皇三度行幸ありて鎮護国家大道場となし
また承和二年には後日河天皇参詣ありて元応三年には後醍
醐天皇隠岐より還幸遊次寄りて寵光冥福を祈り
また後に三堂を建てられ千萬衆の主尊もかく歸依ありし程
なれば寺は山の繁華にして想ひ見るべし
表坂より登れば元冥に四迫圍垣をなす後醍醐のみかど御車寄
の旧地なり此門内にして桜子社あり其事此に詳なり
寺の鎮護の仏堂なる瑞石坂を降れば縄手あり仁王像を
置き昔は路傍平夷二三の小祠を建て一の不礎を立てば花形

ことく聳こゝる間座に沿て長堂の山巍然として立つ心の所ち圓教
寺本堂なり東西九間南北七間本尊は生木山陰の如意輪観
音なり荘厳華麗錦幌朱幔の中仏燈常に耀き法
雲法雨長く山に満ち梵唱聲聴んぬ山葉底ち水殿鼓
きゝて清鳥君を轉る塵外の霊蹟入きして幽性しきに三
昌寺は西国第二十七番の札所にして人生字の歌板櫃に
に掲げ光彩輝かゝり歌に曰く

もゝ〜と登れば書寫の山なし桜のびきも御法なるかな

更に石階をたどりて大折すれば奥院道に出つ講堂食堂常
行堂を過ぎ奥の院に達す堂宇は崇高なるかしけれど風打雨凄皆

いさゝか残り朽ちて昔の面影を留めつゝなほ何れの堂にかはあらむ雜賀の机なるを藏む桜の厚さ三寸、一見大きな俎の如し是甚だ古くして毒蛇朽ちむ計りなり依に傳へて雜賀孝次郎書写を勉めりと云ふ水の井と云ふは元亀に涸れて水を渡みし井なりと云ふ堂の大なるは左甚五郎の建築にして規模典型見るべき者多し他に二軒の廊ありて動かざる鎮護の響を殺ぐるに足る中也も名勝なれば皆見るべきものなれど鳥海流義法流石仏院の霊異を説くして尚もすゝる能はざる者多し山中の一所を住楽して年歳山を下りて廣峰山高ふ

此間凡三里野路の賽路なる為て到る処石標あり故に迷ふ事無し然れども余は夏半にして一回路を迷ひ同じ所を三度通はりし故前林しげき小山を訪へ迂回して漸くに大路を得て程なく宮に出で登ることゝ所にして祠前に達す縣社にして素盞嗚命を祭る聖武天皇天平二年吉備真人康帰朝の時出地を年の神託を蒙り宮師を還りて上奏し翌年始て造營す故に天禄三年西峰より廣峰に遷し貞観十年更らに城に遷座す今の伊弉諾社是なり社地は続らた塀をいたし神門あり本殿拝殿あり地は後に山を負ひ花樹鬱こんとして幽邃深寂他に祠宇あり後山には九の洞穴あり穴上支干の形を書き賽

人錢を投じて福を祈るに社は作物の神なりとて農民の参りて年穀の豊穣を祈願する者頗る繁し然れども祠貌破頽甚だ宏壮なりしく其昔の栄華はも祠を出で一丈許の程なく急雨灑然西より来り疾風立ちまき殷雷轟きて爽快言ふべき状態なり余は此地雨の西より来る者雲なりといへども能く方角を辨ぜず雲斯りに来りし村人達し今日はもとこれ満足せざるなり漸くにして雨晴れ之を登して山を下る十町大路に出づ此法華山の起かむとせし道の程問へば三里ありといへばやみ難き彼の三十三番の一なり程なく城中に入り家に帰る家人皆往還の迂遠なるを責しやまず雨しとの為り法華山を離るるに臨んで慨す

平日船場本徳寺に詣り亀屋の松を見る伝に佐藤海澄なる者の記る所なりと然るこの寺は明治十年の頃駐屯隊の陣所に充てられ猛獣玉虎の跡を存し又城伝統王御筆の寺額の破損せるを見る

市の西端なる小丘に倚り表忠祠に詣で傍に抜魂の社あり眺望豁然として南方帯の平原を瞰下し漁村の煙を出して蜆蛤を焼くを見る

旧路を帰りて帰り市中程より少し分れて射楯兵主社に詣で社殿幽静殿堂荘厳及び数宇

又同じく鐘は赤松氏の納むる所なりしが城内に池沼を堀り風致
殺や看るべく小茅葺などしてあり宛ら一小公園の看をなせり同じく
數所にして城堀下に出づ東西凡そ十町南北凡そ二町外廓を
圍み中央に牙城あり又濠張をめぐらす牙城の外営練兵場
及び射的場に充て松樹正に離々たり牙城内は宏壮なる旅
館の營所にして其中央に五層の天守閣ありて然として半空に聳
ゆ閣は全く白壁を以て造り鮮明にして宏壮世子白鷺城と
年比寓を歸り途に華盛卿に自過す明日こゝを離し
て行かむとすに臨家に殘を惜し茶屋の人情に感じ
清洲更の移るを知らず

十七、播州姫路

二十日十時過ぎ發の汽車に乘し姫路を後にせし河鯖陀驛に
て下車す去れより歩行し南二十丁許にして曽根神社に詣ず有
名なる松を社記を案ずるに延喜元年菅丞相流謫の途次船を伊保の湊に泊せ今の社地より西一町許なる檜笠の
岡に登り四方を眺望せしに以岡上の稚松を抜きて手
から立を社地に立ふ即ち今の曽根の松なり故に村人同を
建て天穂日命と丞相とを祭り城隍創を去り道真卿後其
後敦美尤偶此地に来り昔を追ひ忍び戀を去
られず其傍に同社を造り以て命を祭る其後高世に清

こり天正の兵燹に災上せしが豊太閤再創し以て今に至る
松は社門の内左手に在り旧樹は枯槁して今其枯幹を拜殿
に蔵す今の松は天明元年傍ら生ぜし実生の生長しうる者にして
年を重ること百数年幹の大さ三圍に餘り二間を三丈許枝
葉繁茂して軍陣十畝の内を蓋び恍し大青織を張るが如し
立ち路を東北に下り石鳥居あり石殿は一に静が宮と呼び
幅三尺高さ二尺六寸社殿を創しるがごとき形状なり屋根
とゝのへき部は西に向ひ扉は天上に向ひ其上に幸を留めて三株の榊
植ゑし裏は殿を高しして拝す其近傍は皆龍山岩となる
所色黝紫の石山にして今猶之を切り破り石殿即ち其岩を切抜

きて造りしる者なり且つ石殿の周圍は壁ありて圍み赤色に濁
りしる水を湛へ一見深く測へるものに似たり山の寶殿は神代遺
物にして大に貴し岩屋名の神社の中に経塚を人とし工事はて天
明はじめ其傷を補ひ置きもひなり伊勢屋傳の安
誕なることを云ふ(云ふ)石祠は神体として崇め元前に拝殿を造り
欽明天皇十三年の三年創崇り爾後弟子の流衆を図し歪
世代の兵燹に罹り七の社殿を失ひ今は野社を殖せり皇
当の一山兵歓傳公の三大字を刻せる天然の巨岩なり姫路の儒医
永峰岩峰翁て此地の眺望絶佳なるを愛し自ら書せし者なり
学筆力雄勁見るべし今俗ら瞰れば南に播磨灘

を望み西南遠く家島の群島水面に浮ぶを見る誠に歓賞
の名ふさはしき又佳境となすに足る
山を下りて東南重なりて高砂町に出づる昔時此海岸に松樹鬱
茂し常に林をなし有名の歌枕なりしが近年松林を伐尽して民家を移
し回漕無運の便を謀りたるに大に其の風致を失ひ今は却て尾上
に松ありきを見る蓋し古歌に高砂の尾上とよみしを見れば上古尾上
高砂の空きりしなる所の南端に高砂神社あり其域内射矢弦社
の前に有名なる相生松あり枝葉四方に繁茂し老幹蜿蜒
蛇龍の蟠離するがごとく続き其に石柵を以て此松は元目にして初
代は松村氏天正年間毛利氏の長崎より移せりと伝ふ

ゆえに沿り東に向ひ尾上村に出づる村南松林中に尾上神社あ
り高砂と同じく神功皇后凱旋の時国家鎮護の為め創設
し給ふと伝ふ社域内に相生の松あり相生は雌雄両種
一根より生じ地上を離れて幹二に岐る高砂と尾上と共に歌
詠枝は拝殿の左側に行り其枝保皆東向す故に都鄙を先
枝の松と云ふ尚なる縁由ありや又社前に有名なる尾上の鐘あり
高砂の尾上の鐘の音すなわち曉かけて雲間ゆ聞かむ
と謳しものなし鐘に大きかるも古色蒼然景色寂寥たり傳
へて神功皇后の龍宮より得る物と称し故に大同三年島野山に
移せしに松なく聲を発して尾上に帰り悲鳴絶えざりければ

野辺に帰せしなり。皆皆不幸にして、亂杉蒼生し、皆其形を異にし
地に蟠りて、恰も眠龍の如く、岩石重畳、山水風雅筆も及ばず
島の実に仙境と称べし。社前に茶店あり、松濤の塩漬を賣
る。此地名産中住指の者なり。
畳り東三十丁別府村なる海濱に住吉神社あり、松林鬱然
として立て圓丘数宇あり、華表を入れば左に古松の蟠るあり、之を手
枕松と称す。其枝長く地上に横はり人肱を枕にして眠るに似たり。
高砂尾上高根の彩色あり、人の心を動して其未高く緑深
き所まで、毎月のうち行て見る所にては別府村
の松遠く他に立ちまさりて見るべきなりけん。

多陽寺、此寺日もや暮れなんとすれば路東北に向て歩行す
里有半、かち山驛に達し投宿す。驛中常住寺にかの松を訪ふ
し、今は植継ぎ者にして百日かの花を咲き行きても見ず
三日、かち山を出て国道を行くに道の左傍に刀田山道の碑あり乃
ち行き見る。路田畦間にあり南三十丁許にして達す。寺は聖徳太子
秦の川勝に命じて創建せし者と称す。鐘楼に懸るる梵鐘は大
子が龍宮より持ち帰りしものと、古色蒼然、黄鐘調の音を聴
往事曾て天聞す。老樹林然、四境に繁茂し、見て千年
の霜を知るべし。陰むらは空宇に徘徊せず、全く剏出毋来
廻し昔の壮観、今日仏火凄涼として人をして懐古の情に耐

（おもむき）これより明石まで凡そ五里道に武部陳の松原見るべき者はなし

播州中の名所は大方山のかしこに重に出松の多くは皆少し宛人手かゝ（おもむき）なく餘りに手を加へた者にしてかゝる佳景を見る者の多き為に道側必ず標柱を建て説明を加へ名所舊跡松など記しつけ小みは大に便利なり大抵は海濱なれども海光目前を遮ぎる程の地にて三里山や銀なりかゝりの日不まで間は大抵平坦にして雜樹なく実に奇の際には耐へられぬ程飲むに適する水少なく今して渴を抹茶にてしむかして明石に着しは午後にして市中を過し去り直ちに人丸の祠に上る

十七、明石須磨

明石高城地の東方山続きの一小丘に人丸山を称し此に人丸神社の社は長九寸（七寸）の人丸の像を祭り東西に華表を立て石燈籠十級を設く域内直径数人丸碑亀井侯の建立に係る丘上の眺望佳にして下に明石の市を隔て明石浦遠く青松白沙の数里に連るを瞰し一湾の碧水鏡の如く波静かに白鷗時に起ち帆影点点として淡州に向ひ漁船黒烟を巻いて駛走す実に未曾有海を鎖し暁色僅に曙け一線地光冥茫を破り帆影の樹枝の間に見へ実に如何にも美しく社前に旅客棲ひ紅球燈をかけ海風来て徐に揺ぎまた又たし

東華表をかり裏山路の岩所に出づこと半程陸州志度の墓かり墓前花を捧げて拜す島峠文彩風流世を憧動しうる勇時し九百年以一個無名石となり時に発芽して年ふるのみ覚

行こと一里三家ありて無子の濱に出づ東西十町に亘り古松鬱然として林をなし幾の国道其間を横過す南は清石海峡を隔て近く淡路島と對し風色絶佳の地なり其松皆高さ三丈に過きずして枝幹偃蹇舞如きもの多し踊るがごとき或は臥し或は横り一樹毎に趣を異にす且濱邊の砂は白玉を鋪然し遠波拍じて来る微風吹きて千万松長吟して仙樂を奏す

殊に妙なり世称して播州第一好風致なす海辺酒楼多し五色山海神社太山寺或は遠望或は間暗に見物し行く三里須磨に達す此間海濱洋々の別墅多し殊に大なる雅致を実する感常唐毎焼窯を記す一墳前香火常に絶ず塚の傍に一軒の茶屋を住り敷盛をはやし家を敷盛楼と称す佳麗なり若者の味楽しも美なるに付遠近の名物と為す者皆なり之より東方に一谷の古址あり二居三居を連続し今は黄樹鬱然たり遂に此に一歩敷座弾にすると云ふ所紙

渭鐵拐峰は是なる、

須磨の人家は左右の畑地にして毎戸山藤を軒先にかけ蜂
蜜物の樵薪柴刈味噌を賣る家多し海邊清松
白砂と共に前に阿波紀淡和泉の佳山を遠望し西南近く淡
路島を望み白帆點々波間に隱見し夜は月光漁火と相映
するなど其風色眞に一幅の畫を看るがごとし此地は水清く氣
爽にして特に養病に適するを以て年々来住者多く宿屋
に陸分繁盛せり百事欠かぬ樣になりし爲に從來一
變し多少の趣味を減殺したるは惜しむべし料理屋の
供行中誕生日の踊などつれづれ皆はやしくさびかなず
田舎に相業の者は二所許にして須磨寺を主とし二王門より

入る所許にして本堂に至る其道に雜魔手植の櫻樹(一株)彼の制札を連
ねて殺生禁斷を嚴守せしめ本堂に至り
書院を求むるに一僧出て乃ち案内を乞へば雛僧
入堂所に於て茶菓を出して案内を乞へば雛僧
僧は堂の側の椽の風ちる来る処に華眉一枕の夢を貪りて
揺り起して案内せり堂の後の室を通り寺寶、青葉の笛
敦盛直筆の歌札、敦盛の畫像、雜魔の割木、母衣縮の
名帖、敦盛赤旗の名帖等あり一見して數刻を投じ出堂
左に宝塔鐘楼掛塔あり寺にては有名なる花鹽を造りて鬻
風流佳品なりと頁外

須磨離宮の屋敷前に菅丞相手植の松あり別に記すべき程者にして海濱には細敷天神あり街道を軍所より松林の裡に行菅公を祭り祠殿荘厳なること境内深邃にして殿宇風色に富み傳へ云菅公左遷の途次此地に上陸せしを漁人纜を解きて圓坐に立たしむと。

道傍の樗に村上天皇祠及び琵琶石師長墓と呼ぶ尋四十五丈許数本に分れて立る又源氏物語に云この樗の行きて見れば其他妙法寺、往生院、長田神社遠き所にして遠く離宮に能登うずんの看板を見るかの離宮敷盛をばと對せしなるべし然れども家しかなしかれば又墓と有る

敦盛の海に入るを直實遠く呼びて戰を挑む、敦盛即ち馬首を回して陸に上り、命を敵将に授く、生は輕し惜むべきにあらず、名は重し殊に留すべし、之を知章に地すること決して其下に在らず、桃紅李白、並び馨香し、青琴輙ち二少年を上下すること爾り何ぞ吾が無官太夫を誣ゆる

途上に白石の豊旋りて昔日の戰場を想ひ平知章墓をふかの山陽が獨有武州能持艇婦人拜中見夫人いひしもの実に此人なり嶋崎知章の勇武なるかの敦盛に勝ること方に世人之を推ず可惜

之より東半里許にして神戸に達し一旅店に投宿す。

須磨明石の景は細麗雅致なれども雄壮渾美の趣は全く欠せり抑もかの平安京の全部の如き生ること疎(稀)にして海と山とを兼ねず故に此地(偶)より海山の景色を看て賞玩して指く絶賞りし者固より宜なり。而して此地の景象は優美温和の氣を含み人をして彼等人士の性情に適合せし故をいて更に一層の省顧を受けしこと又疑を容れず此事の源法に次

の甚だしきに。

麿月杜明石高砂を載せ少輝を以て極楽せしより大い此境の名を甚しや明なり然れども余は是を以て絶歓とはなすべ寧ろ蒼茫曲、讃岐崎の勝を完全なるすべて関西地方の景色特に瀬戸に瀕しる海濱は澄小き島嶼中し点行し波浪少なく巖石也し進常に青松白沙長く洲汀に連り二株の景を為す又数百間蘭然世て岬角を出し大洋の波濤銀山を起して来り驚して砕け飛沫霧の如く朝色雪の如く満実数を撃ち海表長吟し鯨吼す鯨悲しむ雄岡の雄を廣寒の景象は日本此部の海岸に於て特に著し

十六、神戸

此地起程の翌日連日西行する為に風雨の登着少く時間を定まらず大雑沓なりし同きし故舟に乗ること、決し郵船会社の汽船若干隻御用船を以て故此地なるが所以なり明治生涯る者なりしかも〳〵それを定説

薄暮市中を散歩し相生橋を渡り楠公祠に詣る赴韓の兵士の多くは此処にて車を下り少憩し此祠に賽して出行するを例とす故に此日だ幾百人登賽し歓者堵の如く道傍立堆の地なし查官数名祠前を守り誰何して猥りに入を禁じ余は遂に涙慨して一礼す十二年前事を思

遠し吉野とはやかけりうる程に兒受けぬ弥に河前の市街
など昔の面影更になし此市も横濱と同じく年々大きくなり今
は兵庫の西まで出ひろまんとす況んや此地の如き今は所謂心
となり飢饉此なりまでなり某書記して雜書数部を買ひ
後燈読し終て河を渡す
三月朝入濱川 河後に沿ふる兵士の妻子を寄せる者多し此
処事を供して生田の祠に詣ふる 官都山社と神功皇后
摂政の時の創建なりと云ふ平氏の城を描ふや谷を以て要害此
処より東門を出る廣潤想ふべし其間僅に三里を餘る社後の
森林を生田の森と称し彼の梶原原太が能の梅の名を留
め乙姫の境内廣敞にして一社殿雅能の梅、梶原井、敦盛
の萩、神功皇后手植の竹など見物の人を応る心地して なつかしく又懐
かしき布引瀧に沿ふる布引温泉の前を過ぎ直ちに坂路にさ
しかゝること三丁にして雌瀧なり 高さ三丈幅二間ばかりと身は
天草なる故にや半間ばかりの三筋水は岩角に觸れて挫折し奔走
すること精緻なり 其前に長廊を架し歡客を招き傍に茶
屋なり 橋を置く此辺錯ば全景を眺るべし日暮の少女茶
屋など持参の弁当を開きまた法外に銭
貪ることなければ注意し勿論に菓子飲料数書を抱
へ高き絶頂なる山路を上ること南北三丁許りして又一瀧あり 雄瀧

羽黒曰不是語瀑云大瀑是一玩弄物而已

〃高十五丈恐三尺ノ小此瀧は世人驚きかたは近傍に類なく且便利なる地に在れば いかゝ世に知られざるべし人事は自然に成りぬるかの秋保大瀑なれども年収には無稽なる神に近傍にて見人に強せし処数こゝに探討の餘暇なく又車を駆りて寓に帰る余此行奥羽要害を巡覧し東海道をくだり下り静岡迄行き以て金谷行路を辿せしめむを思ひしに日なければ詳なしいかは再来の時なの家ならやと自己心に慰め柯て舟出発の時を同じくせいとは確定せざれども多く歩行なるべしと以て無聊をなず年ちは獨り酒徳に倦慢の情を醫す

十九、航東

昼食の膳を召ひ〻うに早く支度しむ舟まで送り申さむとぶに飲むし酒の味佳筆難なり 怨こゝ宿を出で 塩釜に向ふ 舟船に乗し本船まいる時に年收し対酒より 餘りにいそがしく生

羽黒曰青琴過足れし為の宿如此借り置きこゝ事代弗ふこと忘れしこれ物怪の利陶希彦誤破其一年なり 一体同港場の旅宿なれは一事に無礼なる故此位の事則償之而今有此行何先聖人而後極面哉

ずにやるしよかるべし

舟は某回漕船の持ち船にて弱し 出船の風船なり定員は乗客二十名なるに流事の便宜しく 新船奇麗の流船に乗し 六ちりさる故ぜきを〻と乗り込み百年名ず餘ひり 船に荷物

をしてこれに搭載したる為め船室及び餘地なく餘儀なく甲板上に我が所有のものを布きて横臥す此程遠方出港せず荷物搭載の終るを待つなりと云ふ

九月日午前十時出港に臨に碇を抜きて出帆す海上列島を過ぎこゝを去る泉州の山を左に見て次に紀州洋を越ゆ翌三日遠州洋を過ぐ天晴れ穏かに風和ぐも毫も風濤なく船体動揺せず遠く大陸を望むに四顧水天一碧茫々たり

三日朝起きて毫に遠洋を過ぎ漸に相州洋に入り伊豆大島を望む今日中に横浜に着くべしと云ふ心衝く安き海天雲氣多くして終に美容洋を見ず遺憾

船中高き船賃を徴せられしは大なる苦痛なりしは他に最も困難せしは一日二回の食事にして生憎銭低廉なる故(神戸より横浜迄一円半)饑渇なること言語道断にして此の如くに南京米の外なし

食は生来食事の好悪を云ふことなく只此折は隨分空腹なりしなれども過て食ふこと能はず南京米(純粋)を食ひしは生れて始めにして其一種の臭氣ありて中々困難し難く湯漬けとし喰ひて漸く生命の忍耐力を養ひしは一回一椀のみ其食に隣る衆人蟻集し先後を爭ひ餓虎の肉を食ぶが如く餓鬼の如く陶しく有様見るに堪へざりしかと三日の間飯九椀食ひしなれば無氣味男一匹迷ひたまつた者なれば仕方なし

世間に鬼は無きものよ

せしは自身にて手足のやせ疲せる様に感じられ、
に無き人皆ひからびたる奴等のみにして世俗の紙鑑に耐へるもの
き一百石輸快の極人を悩殺せしむ雨後如何なる事情ありしか
してかゝる舟は乗るまじと覚へ如何大阪商船会社の汽船中
等を乗り午後には必ず酒に酔へられしと世ばば実に雪壊の暴
歓首崎を過ぎたる信濃丸に移り速かに世話し為め多少の時間を浪費
かゞ品川に着しは午後三時なり解船にて来られ中に入れり銭を
せしと多に無き人皆五厘を義捐しられ彼は十五位の男等
が荷を担ぎ来りしにや、
品川に陸せし両人到る処事に新橋に至る又事を駆りて

出発なる快哉家を辞して投宿、かて東京に行ること西三
日、仙台屋なる我が塞校の寄宿屋廃せしより少き驚きて又
発す、旨午後上野を捨し此砲白河泊し、日午すぎて仙台屋
を雪の後過ぎ此書街を移る塩浜北征の宿志未だ達せず
面にして蹴せし南行雨松孤んで千里多少の景勝を探ることを得
しは段煙霞の痼疾を驚し鴻雪の縁又奇なりと云へし而し
て余が同人に先ちて鞭を耶馬渓に着けしは最も心中に快とする所
なり若し夫れ島海の山、龍湖の水、雄鷹の島、羽衣血の碑等を辛て
は主人夏必ず富に帰を実き鞋を着くべきの日快なる哉

關北の雪

明治三十年四月十日午前六時に起きあがり支度して同志の渡邊留等氏と馬車場に急ぐに備ふ百五十年の昔しけんぢ見立の夢に成地蔵ひつや待ちて馬車の来ぬれば乗りて一聲の汽笛を空高く上て北よりしきしり初めぬ汽はむきはらまし夜明けは可き心要さなんばしはしばりも眠りて夢を続けばやと思ふ程は半の揺ること甚しくこいもわやらずやがて窓より開き眺るに月は雲間より漏り地上を照す影の雪かと誤られ遠山の色旨くして遠近の木林のしげみの煙るきさはなら

くにたちしければ暫し見惚れてゐに朝風吹き来
りて雲拂ふた跡さながら密鎖せし障子を開きの眺に出
様と覚へぬ
岩切利府松島なる過きし日の湖水にかゝる白雲
ならむと密細目に推しやりて見れば春の水の漲りて曉な
れば星りて一つ二つ煙と紫はれ湖水の上樹なれは凝
りて一面となりて松の梢か提灯に黒き雲の空に散
くて物凄きまでなるに折から雲絶間より有明月
きやけく露けれ書を光を波に映してうれしき
ばかりに波寄べくに入しかくれば車中の人々
仙台に眺むるに暇なくやがて程なく半田につき車を
下り四時頃に帰りしに歩を速めて行く朝風
空に吹き送り佳水浴びかきに東雲の空漸く
白くなり物皆白くなりぬけたり一望
無邊の平野にして春のくる三迄なれど蒼々たる
矢枝のみに異なるべしと野中の水に乾きぐが枯蘆
の穂にて風に乱れてよりて寒き
の穂はいとれ流れ山この日見へつゝ雲煙の見へ
やゝ島の茂林を出で鶏釈寺なるれば日之なる春
雪乃裾りくたて皆裏くに計りなり

目の前には家々に集まりし煙の上る所しきりにかぐ
河はでに知らぬ所なり。西よりまた朝食もの出そうぼ
り行くに小さき町を抜け出て、漸くにして何処にか飯屋
く家を尋ねしそ行程に一里半過ぎ程一軒茶
屋ありけり。今は腹地く難き迄に空しくなりしかば急
きこれに寄り飯を乞ふに五十餘の婆出で来り
切りと差へ急きて膳を出せよとのことにやとて持ち来りしと見れ
ば鉢に盛りし米に切り少し許りと清菜のみなりし飯は米に
見せかけ米屋の軒の梅の実を盛りと実をばかりに
見せかけ米屋の軒の梅の実を盛りと実をばかりに
食べ切り値を問へば五銭なりとのことに仲天と婆の食ふ
ことを止めしきと限りなれども詮方なければ言ふがまに
拂ひ出でこれより一面の平地として列に
なく岩田山とつゝく
式は伊達氏の城地として政宗仙台を移りし迄ここに居
りしとし今も戸数千餘を見受けられ繁華の程は南
方なれども共に駿州府の分邑なるべし
町を出でれば沼の橋を渡り式より出でて
墨色前を異なり下宮の町行くに姥澤鐘山とふ

木標所々に建て候に行き見むとて路行に分け
間を行くに山深く生ひ茂り山むら〳〵ひき累ねば先の白
達ひ行き見むひしかや餘りに早かりつるを同はれ赤河
石と云へと行きすぎぬすと名所旧跡などを尋ねむと
知る所なけれども心すきこと数行く或は道に標を
行き迷ひたに見るに三らぬ処にて〳〵心苦しのせらること
心苦し或はかねてより同はむと思ひし処やはしまず
恨をのこすこと行りこの鐘山の外は国よりもとぶき所にの
らねば十余所を拾せ〳〵みに絶りしか

重複

[illegible]

一、怪しき名所

やがて小黒崎と云ふにかゝる巖石峻として天を支へ松其上になら
びて馬髭の如く其下には名花れの楓を多し此山は銀を出す
故に昔し密に採掘せしが或時雷不崩れ土砂埋て
数十夏の所を歴て此所〳〵も甘汲は是はしき死人山の名を負は
せ採掘の事もやみけるが實は空しく堀〳〵埋め置きたにの
らねば近年より又着手せ〳〵まる
三山脚に池月沼あり元禄元年宇治川の戦に笠懸の功を
奏〳〵る名馬池月の産地なりと傳へ池のかの馬は上総の
国より出てしとの説も行ればは直に信ずべきにはらず

ズミより西南五町許りの処に美豆の小島とて士族に名
高き名所なれど――なんぞ、そこまでいこうはならぬゆゑ止き作
る物から皆行きて見ず

二　温泉村

路高きて行程に四方に花淵山をこゆと高き山の雪白うい
さぎけるが折ふは雲かゝり其山上より吹きたる風は寒き迄
難きに鍛冶屋澤よりて書食をし去て鬼首への道問ば
鳥子より行方路よりてこゝより直に行くも可なれど山中の山路
なれば迷ひやすく且つは双方共里程は同じと聞き或者きらば
遠廻りして鳥子を行かむと思ふに又今日は已に暮れんば
鳥子に泊るべし明日皆之向し一里半と聞くものから心勇み
て出づ
路は荒雄川のふちに沿て本路は對岸に行て川渡半
赤湯の温泉場を過ぎなりやがて橋有り川の流は急にして
逆巻の波の石轉はす勢凄まし一いと危きに薄氷を踏
むの思をなし渡りてれば四軒温泉にして少し行けば新軒
温泉有り
よくすまに一天俄かに曇り花淵山は雲に包まれ日影うす
く陣風颯々として雨を携き来り吹に霰を打ち交ぜ
用意の油紙用意し引きかぶり面を打つ雨粒掛ひなのず

進みゆくに程なく鳥子につきぬ
鳥子とは義経の逃れ来りし節武蔵坊子弁慶の聲を
聞せし故に名付なるべし然かるに怪しハ湯中の窓なしして弥に暗に
旨ふ家も勘からず其を尋ねに一大獣を側に寝けさぶが
豹と付代年の峯所を形して角有り毛色は猫の如くにして
の如く者と同じ者猫とのうり山を獲しものと笑ひ見
知り者なれば怪しと奇らし
さらぬ家と宿りたその前に湯殿あり井戸有り蒸氣常
に昇りて雲霧の如迷ふ家は樓低しいさゝかなり天井もな
ければ窓も無に家に一体に むをうしく 穢けなり 樓の前には数

十間の野生所の畫く孤岳より成り其下に温泉神社の
昇る所荒涼極りなし是地は四方大山岳の地にして外は
温泉孤岳と言四方者にて 此より 十洋の処に 湯沼 と 貴大
沼湖となりて 流れ 出る
此家なる湯は 曼湯 にして 浴すれば 肌滑 なり 人をして 鰻に
化する思ひらむ 掬 よりも 長けりと 感し 猶浴すること 四五回
こに事る 浴客は 皆男も 人の 心 数 しき者のみなれが 酒飲み
浴し中にて 歌など 歌 に 宜 喧嘩 のいとし
粗末として 四 十 難 免 い 飯 酒 酒の上 掏 酒 と 称 して 同 大
せしの 数本 漸 に 物 して 鬼貢の 浴 を 同じ 里数 百数

とを考へに西三百を埋ず保なれば路に止めつ押し鬼首は
湯山迄六〇里一〇上湯にして鉄砲水以ては屋指の岡歌
泉にして三丈ほどまで湯を吹こと上るよし少き待るれば是
非見むと思ひしに今は力なく只明日を待るのみ
かく表議に相を更し冷かに薄き帳面に旅の夢結ひの
〈わ明く小は十一日朝立ちむとして勘定をすに宿の者有は
召されはりしに二銭を引き申さんなれば魚
價連城より貴く旦つは客をなすに木賃の法よりんば
ふるしまめやかなること知られて快し
今朝は強く降雨の白きを以一里半程の岡少

し宛登まわり〜り行けば蕎麦畑の道より制寺
怪しかられて斬に載すと云ひし孤前開地にして巣師堂
の中に岡神有り
やゝ陸道上来るに山崩れて岡を塞き岡中の水溜りて
通り難きやうなるに傍の孤屋を拆きて岡に流れ道
なしと云ふに近むかく進みゆくに水は深からねど脚半草鞋
書く脱し漸に岡を出つ一所許りに行けるし
岡を出れば山はしき俄に嶮し崖高くして谷深く水敷広
隆り上なる山は傾きて崩れむ許なるに大深沢、山深澤
なる流橋の所より陸を渡りて此を渡り

心ゆるし、山より先は平原の路なりして、別に羊腸を覚ぼず花
淵山し今は後ゝなりぬ

中山温泉への路と分て旅人の傍に出で湯数個湧き出る
穴ありて其さまさながら金の中にて湧ぐがごとしこれはまた温
泉なるが岩間より出てわれば土まじりにて濁れば浴場
はなをぬなるべし時鳥盛んに啼き命みてその音乱れ冷却して独鳴
土のつきゝるが針のごとくして美し
こは中山城を望が別段厳と覚ほしき所なく唯
周囲打ち廻きて羽前国界田沢村につく、

三、辺地の蕎花

北地の春遅き五月雨なるに比べば下月雨なるに比べ羽前の
北境にしていれば雪の降り積り尺に埋まる程
なれば弦雷猶白く梅雪堅く鳥聲なく草寂けなる
地見（温泉行）より先の方最上の上流に沿ひて赤湯の道
の長く雪深し
十百の暁毎に雷の厳かなるにはしも朝日の光
暗り波り四方の山に赤方は雪の解けゝる春に成るなびき
て白い山はまだ白に帯びて白に帯ればは平原にて
前は大巣なるけしきなるに七月半夏乱れし風なく
して霧なれば田舎の家の前土の乾き所ゝ庭ゝ幼

き孫子の游び戯れに歌ひつゝ
おとしうまき神に歌ひ
雪切り雪を砕き家なる所を
流水の遶り梅数株笑を含らし
樓の傍れる淡解け初めて鳥く音休らしく
天童の方の近くほゝに望の平原にして雪消へなく一面には
麦ちく一面には菜の花黄金の色を美さ
は盛り也とすきくり一面に
岡山二ヒなどにぞ流れ
面の舞鶴山は昔見まに
桜は千歳を知りて緑望古し

四、浮島

十三日今日こゝは兼て考ませし浮島見むとて
り友なる人の見物の事数里の間事なれば今日は閑
山城の帰るなを云ひ
全福寺とて奥に勇むに皆こゝに限なし実に河に
を指し童子にして最前を渡る所のまは天童も
程なり山近く地平かなるまし雪なれは絶てなく春
の日影のうらゝかに蝶舞ふ
左澤の町すぐに市ほりと賑しく賑かに魚買
津前の商は強く異く異を術を討ひ難き計りなり

て藤田富澤中澤などを過ぎて大安村を出で困難きわまる旅
疲れたるまゝなれども村端なる寺に行き請ひ求めて渇を癒
す事暫らく駐の出て来り斬られるまで物語り路行く
同ひやぐで繰り返す
折しも空曇り日影忽ちうすくなりぬ見渡すに山重畳
し路狭く坂急し顔三つ四つ越へて大暮山に入るつゝこと
は八十許と聞き富士の路なれば嶮しき山の陰なれば
雪猶残る折柄なれば沼らしきものかつて見ず路を問へ
ども応ずる人なく疑ひ惑ひて折よく崖の上に斧を伐る
音のすゝと聞こゆれば人行りと喜び手かけて問ふに樵夫は西を
指し示す三の松のほとりこゝに尋ねむ浮嶋ヶ原と行き方を急
き行きて断崖に出ぬ
池は思ひのほか小さくして島らしき者一つ見へずこは如何に怪
しみて辺を見れば二三丁先に人の童牛に蓙を負はしむ
こゝに牛ひかせて馳せ来りて問へにまるんだ　なぎよしこゝに初
めは島は流れつゝ居ると問へば童曰ならず岩さへ沼見物は猶
早ければ池の岸なる茶屋に来ぬ問へば島は宣の
根の集りて結び付きて形をなして水も泛び風のまに〳〵吹き廻
されて東西に走り南北に走り集まりては離れ離れては
集りて流れも曾て衝突することなき世なれば稀なる奇観

なるが如く時節早ければ皆池の陽よりすっこみて走り出でぬなり
と云ふ
げに時節の早きは昌蒲なきも空しく見過すべきにはあらずとて
池の中に実をなる岬に結ひ付て見る對ひの岸には
老松数株立り其色清らかにして木の下影くらく竹に一
軒の庵ありしるべきまに見る家なり童のいひし茶亭なるべし
池をめぐる丘陵は樹立深く岩間には残雪なほ白し池の
面に風なければ漣らたゝず起らず鏡の新よ磨きしかと有る
物も皆影を顧しだ浮ひ出るがごとし景色は奇を
云ふには有らねど僻境にありて人跡少く自然の景趣活動

すれば恥無き難き男女やうで陽に浮る島も拔延て
つき放せば飛ぶ事もして漂ひ泛まれた奇なり奇なり
ぶ程なる鴨にやあらむ水鳥の二つ三つかなさの指蓋の中より
ひきて鳴きさしきにて羽ばたき高く鳴きなきを見回
かちと飛びもりぬ数多き島々の岩なれば苔むしたる
と人怪しみて云へば他の人云は此謂島のかやの枯れて葉なく風
を受くべき物なければ動かぬなるべしと云ふに説得面白き
うなづきぬ
式処のけしき悪しきならねど其所の名ゆゑ其の真趣を
端倪すること得ざりしこそ遺憾なれ夏の初めつ方来

この若葉の茂る山もこ濃かに山ゑ同じは杜鵑花咲き
松の枝にかゝる藤の紫常盤なく垂れ池の水靜かにして影
をうつす時などこそ見処多からべくやうに燕子花のやゝ咲きに
咲きそめし折風に吹かれて島ぞもの走り違ひさゞめこそ一層
の眺なるべけれ
かゝて暫し見とれて居に日曇りさる空より晴くなり近くなり
行すぼ今は遠くまで眺め渡るべきにはらねどやゝ立ち去る前の
童は牛引ひきてかへりけむ影さへ見へず

五、高湯

十四日小雨霽るゝを待ちて歌む宮石を出て五里余にして
山形に着くこゝは既に二回も来りし所なれど火山の跡
ぞ建て直さぬる多く甚昔と似べくもはらぬ
置島湯つゝ藏王山の西麓より山深く便りの所
なんぞ温泉は殊の外よく且つは山形の中を近けれむ四時共
の賑ひ宿屋などゝ湯子の吹よりの遊事整ひさり湯屋
硫黄泉黄多くが殺黄色透明よりて不を置みる湯壺
中に漫く浸へり殺回浴すに必ずすがしし
明日こそ藏王山越へて赤根より新かむきて宿の主に問へば今
年は未だ越しる人少なきを安南者をゞに住ふて行き孤
侍越へられぬことよりはらぬ山頂には書猫

ほ深ければ定めて困難なる事なるべしと思ひ是非に越へむに案内者雇ひてよと頼めば生憎し中者土三名なりやがて帰りて案内者は路のつらさを計り難けれども強ふとも老らじと答へしよりいふに我は一度登山しければ大まかに遠慮も考へたれみなく是より何程なむを思ひ煩山に入者等はまづ峯を見きらめければ吾案内して呉れよ一日歩越へて行かむことよけれといふに果果遠慮なく同しいよ〳〵そんと定めぬ

こゝにて旅のしるべは一坐の中に二人景乃屋ちらつきしことなり鶯風ふぶの卯を彼方櫻桃ふぶ桃ふぶ蕾を定ひきるに而ふ成美

ほり鳴中阿婚頂らくに金色を藏すべし可と

春琴さん中々……

誰か知らぬがこの評ふかく味きやる。

六、三日間

十五日、山形を出発して途上一作を想ふこの家の娘にやなるむ十三四の女の作の事とて働ふ髪の結ひぶり衣物の着ぶり怪しく大人ひとりに笑ふ辰彼れて遠を露はせしが黒く染めたり

初ては生ける花にてはりしよと一笑し枕山公の早婚美嬢を賦すること一回

又行く途中村家の女を嫁するを見る粧態や盛なり

余屋に桃夭を賦す

七日峯をつきて五百ら案内して峯に登る黄昏前峰野

火燃て半天の上を輝かん然り

十六日 天霽れしから清空に雲り風きびしく寒きに朝も
く出等をして二日路よりかゝる嶺頂雪猶深し去年見し
通りのけしきなれども船神岩の辺り幾度見ても目新しく覚ゆ
さぶ去年は山櫻今を盛りと雨を山の峡より白雲捲りかせ
強にうらはしかりしが今年は時早き故か眺のなきぞ惜しき
野辺を捨て大磯よりいくこゝはわが夢よりも忘れ得ぬ幻
境なるが相ぶとと迄の四回今は孫東素の初たて雪解
の水の張りて瀑響凄しき迄として美歓の極なり
廿和杜保より泊す黄昏又野火を見る
十七日 昨夜いふに宿をもつよべの雨の痕なほ濕ひ寺田原

の辺り前(出てゝ)草の芽に露の珠置きそゝに清麗なる
日の光のてりそゝ強に美し取捨ぶりて行く程に菜花麦
畑の畝畝は所に色なき小さき草花の露路の恵みの
ことなるなきに笑き出てゝ又なく哀れなり二年の頃れ
堤の土抜きそ生ひそゝなりし鶯の羽色白ふ梅の香は盛り
すゝて溜水の中より櫻の一株出さに目出度咲ひて
朝日白ふ蝶の片と飛ひ蝶出谷の戯迷蝶蝶
不知遠却到花蕾忽也回の白さに思ひ出てゝ春のけ
しきの美しく空の色艶なる閑此の雪ふみ分けて還り来
りし我が目は心も空になる年なり

午時仙臺子今瀬踏園歌の櫻見ぬ間に咲きて我を
待さず明日は散りなむ程と感りや過き花の人行
きかひつゝ衣の香、扇の影、路のちまさよみち〳〵